

書評

ホルツ博士の最新恐竜事典

トーマス・R・ホルツ Jr (著), ルイス・V・レイ (イラスト) 小島郁生 (監訳)

朝倉書店, 2010年2月25日発行, 467pp.
ISBN 978-4-254-16263-9, 12,000円 (税別)

ホルツ博士とは何者だろうか。米国はメリーランド大学カレッジパーク校の生物・地球部門の代表者で、恐竜マニアならば必ず知っている。本書には恐竜グッズをかかえた9歳のトム・ホルツの写真も載っており、正真正銘の恐竜マニアである。なぜ「ホルツ博士の恐竜事典」なのか。著者は、ジュラ紀の大型肉食恐竜が進化して白亜紀の大型肉食恐竜になったのではなく、ティラノサウルスは小型のコエルロサウルス類恐竜から進化したことを分岐論で明らかにした研究者の一人である。ホルツ博士は恐竜研究の最前線にいる。だから原題はDinosaurs: The most complete, up-to-date encyclopedia for dinosaur lovers of all agesなのだ。

恐竜マニアならば、高価であるにも関わらず、絶対見逃すことのできない1冊である。イラストを描いたルイス・V・レイも大の恐竜マニアである。また、監訳者も恐竜マニアかもしれない。

恐竜マニアでなくても、本書は楽しい。4人の訳者もきっと楽しく訳したであろう。カラフルで生き生きとしたイラストは見事である。きっと恐竜はこんな色ではなかったろうと思う。しかし、恐竜の色は化石ではわからないから、どんな色も許されてしまう。最近、羽毛恐竜シノサウロプテリクスから赤茶色の色素が、他の恐竜から黒い色素が見つかったという情報が伝わってきたが、これは例外であろう。軟体部の証拠もほとんどないので、「こうではないだろう。」と読者が思っても、イラストレーターは平気である。でも「どの恐竜も化石から色はわからない。たぶんこれからもわからないままだ。・・・推測することはかまわないだろう。あくまで推測だと意識していれば、もしかすると、将来の発見でその推測がまちがっていることがわかるかもしれない」「私もすべての疑問に答えられるわけではない。それは誰にもできることではない。だからこそ、恐竜学者は研究しつづけるのだ」「恐竜の世界はつねに変化している」と書き加えることを忘れない。

恐竜に関する私たちの疑問に著者はできる限り答えている。「恐竜発見の歴史」、化石のできかたの前に「岩石のできかた」そして「化石のできかた」、「恐竜化石の古さはどうやってわかるか」「化石の発見から復元へ」「奇妙な化石の名前」「恐竜の進化」「恐竜の起源」と説明していく。分岐論の説明も詳しく、わかりやすい。

その後は各恐竜の分類群を説明していく。竜盤類として、コエロフィシス、ケラトサウルス、スピノサウルス、カルノサウルス、コエルロサウルス、ティラノサウルス、オルニトミモサウルス、デイノニコサウルス、鳥類、竜脚類、ディプロドクス、マクロナリアなど。鳥盤類として、装盾類、剣竜、よろい竜、鳥脚類、イグアノドン、ハドロサウルス、厚頭竜、角竜など、最近の知識が整理して述べられている。若い読者ならば、たちどころに378ページのすべての内容を理解し、記憶してしまうであろう。

巻末に80ページに及ぶ恐竜リストがある。原著者のウェブ

サイトにある2008年7月31日版を翻訳して掲載したという。108の新しい属、55の新しい分類カテゴリーの追加を含み、また正式名がつけられるのを待っている属も含まれている。このリストから恐竜学自身の「進化」をみる思いがする。恐竜のカタカナの名前についても監訳者のあとがきに触れられているような翻訳の苦勞がしのばれる。ラテン語の読みを基本としながら、地名や人名の慣例も取り入れている。あと数十年後に、本書の訳がどれだけ多くの人に受け入れられるかで評価されるであろう。

ところどころにベージュ色のページが挟み込まれていて、33名の現代の恐竜学者が紹介されている。日本人の研究者も一人いる。実際の研究のわくわくする魅力や苦勞などが書かれている。ベージュ色のページを読むと、恐竜研究者がさらに増えていくことが予想される。みな若い。恐竜研究がさらに「進化」していくのもあたりまえだ。素晴らしい贈り物を書いてくれたホルツ博士とレイ・イラストレーターに感謝したい。

矢島道子

Paleoclimates: understanding climate change past and present

Thomas M. Cronin 著

Columbia University Press, 2009年発行. 441pp.

ISBN 978-0-231-14494-0 (cloth: alk. paper),

ISBN 978-0-231-51636-5 (ebook) 10,115円 (税込)

気候変動は人類を含めた生物に強い影響を及ぼしてきたため、古気候は18世紀初頭の氷河説論争以来200年間にわたって精力的に研究されており、研究成果はNature誌やScience誌に頻繁に掲載されてきた。また、IPCC第四次報告書にも古気候研究に1章(第6章Paleoclimate, 66ページ)が割かれていることから分かるように、地球温暖化問題に緊密に関わることから、古気候研究は近年さらに活発化している。このような趨勢の下で、本書は刊行された。

著者はアメリカ地質調査所とGeorgetown大学に在籍する介形虫を用いた新第三紀・第四紀の古環境解析の第一人者で、国際誌Global and Planetary Change誌の共編者であり、上述のIPCC第四次報告書のPaleoclimateの章でも、著者の論文3件(第一著者の論文は1件)とテキスト(Principles of Paleoclimatology, 560p.)が引用されている。

本書(A4版)は、過去38億年間の気候変動を平易な英文で網羅した総説で、ebookとしても出版されている。p. 1-347が本文、p. 351-357が付録「古気候指標」、p. 359-431が参考文献、p. 433-441が索引である。その引用論文数は2,572に達し、2009年の論文は10あるので、出版直前の最新の研究成果を取り入れたものと言える。

本文は12章で構成される。

1. Paleoclimatology and Modern Challenges (p. 1-26)
2. Methods in Paleoclimatology (p. 27-56)
3. Deep Time: Climate from 3.8 Billion to 65 Million Years ago (p. 57-80)
4. Cenozoic Climate (p. 81-112)
5. Orbital Climate Change (p. 113-148)
6. Glacial Millennial Climate Change (p. 149-184)
7. Millennial Climate Events during Deglaciation (p. 185-214)
8. Holocene Climate Variability (p. 215-242)

9. Abrupt Climate Events (p. 243–272)

10. Internal Modes of Climate Variability (p. 273–294)

11. The Anthropocene I: Global and Hemispheric Temperature (p. 295–318)

12. The Anthropocene II: Climatic and Hydrological Change during the last 2000 years (p. 319–347).

本学会員に本書を紹介するため、本書評では上記12章の中でも、古生物学と関連が深い3章と4章において、評者にとっての新知見を中心に列挙するというスタイルをとった。

3章は先カンブリア時代の全球凍結、古生代・中生代の気候変動が紹介されている。全球凍結では、(1) スターチアン氷河期の年代値は $723 \pm 16/-10$ Ma と 735 ± 5 Ma の二つの解釈があること、(2) 580 Ma に Gaskiers 氷河期があったこと、(3) スターチアン、マリノアン、Gaskiers 氷河期ではそれぞれの氷河期の後、わずか2,000～10,000年間で海水準が600 m 上昇した可能性があること、(4) スターチアン氷河期とマリノアン氷河期の継続時間は約300万～1,200万年間と推定されていること、などが記されている。古生代・中生代の気候変動に関しては、3つの代替指標（土壌中の炭酸塩の炭素同位体比、気孔指標、有孔虫のホウ素同位体比）から復元した大気中のCO₂濃度変動との観点から紹介され、(1) オルドビス紀末期（～445 Ma）の短期間（～1–2 Ma）の氷河期は、産業革命前の濃度（280 ppmv）の8～12倍のCO₂濃度の下で起きたこと、(2) 443～423 Ma（シルル紀）にはCO₂濃度が高く（4,000～5,500 ppmv）、海洋表層水温は現在よりも5～11°C高かったこと、(3) 約420 Ma以降は、気温とCO₂濃度との間には1次オーダーのリンクが成り立っていたと推定されること、(4) 顕生代における大規模な氷河作用の発生におけるCO₂濃度の閾値は500 ppmv以下であること（但し、太陽日射が弱い時はそれ以上の値となる）、などが記されている。また、ジュラ紀–白亜紀の海洋無酸素事変（以下ではOAE）および午線方向の温度勾配、白亜紀末の寒冷化（白亜紀–第三紀境界の隕石衝突に伴う寒冷化ではない）などが扱われている。OAEによる気候変動に関しては、Toarcian OAE（前期ジュラ紀）に関しては溶存酸素に歳差運動起源の変動が見られることが紹介されている。また、102～82 MaにはCO₂濃度（600～2,400 ppmvの間で変動）がコニアシアン（97 Ma）と後期チューロニアン（89 Ma）の二回に渡って極大になったが、このうちチューロニアンの極大期には、表層海水温が赤道大西洋で33～42°C、フォークランドプラトーでは30～33°Cに達したと推定されている。なお、第3章では本学会会員の日本人研究者の論文が2編引用されている。

第4章は、氷期–間氷期サイクルが顕著になる2.7 Ma以前の新生代の気候変動を扱い、気候代替指標や気候変動のメカニズムの概説、暁新世–始新世境界の極端温暖化事変（以下、PETM）、始新世–漸新世境界（34～33.5 Ma）のイベント（以下、Oi-1 イベント）、中期鮮新世の気候最良期（以下、MPTO）などの気候変動の実態を紹介するとともに、大気中のCO₂濃度変動との比較を論じている。この章では、(1) CO₂濃度は前期漸新世～中期漸新世（33～28 Ma）に500～1,500 ppmv以下に減り、後期漸新世には350 ppmv、漸新世と中新世の境界（23 Ma）には産業革命前のレベルになったこと、(2) PETMのCO₂濃度は600～2,800 ppmvと推定されていること、(3) 生物攪拌の程度の小さい深海堆積物試料を用いるとPETMの炭素同位体比の低下量は6%に達すること、(4) Oi-1 イベントに始まる南極氷床形成時のCO₂濃度の閾値は750 ppmvで、北半球氷床の形成時の閾値は280 ppmvと推定されること、(5) 始新世–漸新世境界におけるCCDの1,000 m余りの低下は全球規模の炭素循環と大気中のCO₂濃度に関係すること、(6) MPTOは50万年間続き、CO₂濃度は約340～370 ppmvで、半永久的エルニーニョ状態だったと推定

されること、などが紹介されている。

これ以外の章については、ごく簡単に紹介する。1章は気候とその変動メカニズムの概説、2章は編年方法・代替指標を紹介している。5章は2.7 Ma以後の氷期–間氷期サイクルの実態とメカニズムに関する概説で、6章はダンスガード–オイシュガーサイクルとハインリッヒ事件を扱っており、7章は最終退氷期における南極の寒の戻り（Antarctic Cold Reversal）やヤングドライアス事件などの数千年スケールの気候変動について概説している。8章は完新世の気候変動について紹介し、9章は最終退氷期の融水事件について述べたもので、アガシー湖の淡水がマッケンジー河を通じて北極海に流入したことによってヤングドライアス事件が起きた可能性が高いことが記されている。10章はエルニーニョ–南方振動、北大西洋振動、北極振動などの気候変動について述べられ、11章と12章は最近2,000年間の気候変動（気温、海水温、海水のpH、氷床量、海水準変動など）について詳述している。

なお、本書の優れた点としては、読者の理解を促進するために、重要な項目をまとめた表が多くの章に載せられていることである。これらの中で、特に、5章の天文学（Orbital）理論とメカニズムに関する研究事例の表（Table 5.1）、6章の最終氷期の数千年規模の気候変動に関する用語、年代、随伴する気候変動の表（Table 6.1）、7章の最終氷期から最終退氷期のイベントに関する用語と年代の表（Table 7.1）などは、実に良くまとめられている。

以上のように、本書は2009年初頭までの古気候の実態を網羅した大著であり、これを読めば相当の知識を入手できる。わずかながらに、評者が見つけた“穴”は近年、日本人研究者が発見したインド洋ダイポール現象の記述がないことであるが、本書から評者の得た知識に比べれば、その“穴”の大きさはごく小さいものである。評者は古気候学に関わる研究者に本書を一読することを積極的に薦める次第である。

北村晃寿

Cephalopods — Present and Past

Kazushige Tanabe, Yasunari Shigeta,
Takenori Sasaki and Hiromichi Hirano 編

Tokai University Press, 2010年5月発行, 314pp.
ISBN 978-4486018766

本書は、2007年の9月14日から16日に北海道大学（札幌）で開催された第7回の国際頭足類会議（International symposium “Cephalopods — Present and Past”）の成果をまとめた論文集である。本シンポジウムは、Organizing Committeeと21世紀COEプログラム「新・自然史科学創成」、三笠市、北海道中川町の共催で、日本古生物学会の後援を受けて行われた。14カ国から97人の頭足類の研究者が参加し、1) Paleobiological aspects of fossil cephalopods, 2) Biological aspects of modern Coleoidea, 3) Cephalopod taphonomy and new techniques, 4) Paleobiology and systematics of Mesozoic Ammonoidea and Coleoidea, 5) Biostratigraphic and paleobiogeographic aspects of Ammonoidea, 6) New approaches to cephalopod biology and paleobiology, 7) Paleoecology, biostratigraphy, and extinction of Ammonoides の7つのセッションが行われ、42の口頭発表、34のポスター発表が実施された。本論文集は、それらを1) Biology of Modern Cephalopoda (6編)、2) Early Ontogeny

and Constructional Morphology (5編), 3) Phylogeny and Systematics (9編), 3) Taphonomy, Paleobiogeography, Paleoclimatology, and Extinction (5編), 4) New Technique for Cephalopod Paleobiology (2編) の4つに区分し, それぞれに関連した論文を掲載している。

本書をみて最初に目を引くのは, 表紙のイラストである。この図は, 本書の中に掲載されている “Ammonites from the Cretaceous/Tertiary boundary, New Jersey, USA (Landman *et al.*, p. 287-295)” の論文中に描かれている白亜紀絶滅前の海の様子である。当時の海洋生物の様子が細部まで復元されていて印象的な表紙となっている。本文では, 巻頭に松本達郎名誉会長への弔辞が述べられている。この国際シンポジウムの開催は, 日本のアンモナイト関係者にとっては悲願であった。会場にはお越しになれなかったものの, 日本で開催できたことに関してはご満足されていたに違いない。

最初の「Biology of Modern Cephalopoda」では, 生物学的な研究論文が掲載されている。タコのペプチド構造, コウイカのミトコンドリアを使用した遺伝子解析, 頭足類のボディプランの起源, オウムガイの解剖学, オウムガイの窒素同位体比を用いた分析, *Spirula*属の形態解析の6編で, 様々な分野にわたっている。「Early Ontogeny and Constructional Morphology」の部分は, 初期殻の形態や殻形成に関してシルル紀のオウムガイ類 (Barrandocerina), デボン紀のアンモナイト (*Agoniatites*), ジュラ紀や白亜紀のアンモナイトの標本 (Aptian, Campanian など) を扱った5編の論文から構成されている。

「Phylogeny and Systematics」には, デボン紀の新種の記載と初期デボン紀における進化に関する論文が1編, 石炭紀に関する論文が3編含まれている。石炭紀の論文は, 2つは北米産のアンモナイトの顎や軟体部に関するものであり, もう1つは形態と微細構造に関する論文である。ジュラ紀に関しては, 英国産の保存のよいペレムナイト化石の記述と日本の *Pseudoneuqueniceris yokoyamai* の形態に関する論文の2編がある。白亜紀に関する論文としては, 日本産 *Naefia matsumotoi* の再記載と異常巻アンモナイトの右巻・左巻に関する論文の2編があり, 残り1編はペルム紀の東アジアにおけるアンモナイトに関する新発見である。

「Taphonomy, Paleobiogeography, Paleoclimatology, and Extinction」では, 日本のペルム紀のアンモナイトの総括, 北米の初期三畳紀のアンモナイト層の記述, 現世の頭足類の情報からアンモナイトの古地理分布に関して考察した論文, 中央太平洋の最後期白亜紀の古水温の論文, そして表紙の図が掲載されている北米ニュージャージーの白亜紀/第三紀境界 (KT境界) の論文の5編が掲載されている。最後の「New Technique for Cephalopod Paleobiology」では, アンモナイトのデジタルイメージに関する論文, 紫外線やX線などを使用した観察法に関する2編の論文が収められている。

残念な点を挙げるとすれば, Contentsにはカテゴリー区分が示されているものの本文中の論文がどのカテゴリーに属しているかわからないこと, 「Phylogeny and Systematics」の論文が時代順に配列されていないことが挙げられる。この2点が専門外の読者が使用するときやや不便を感じるであろう。しかし, これらの点は, 本論文集の価値を下げるものではない。専門外の方にはやや難解な部分もあるが, 最近の頭足類の研究成果を概観するには最適であり, その研究の進展を認識することができる貴重な論集となるであろう。ぜひ, 一読をお勧めする。

西 弘嗣

植物化石 5億年の記憶

塚腰 実 (監修), 西田治文・塚腰 実 (著)

INAXギャラリー, 2010年3月15日発行, 72pp.
ISBN 978-4872758511, 1,575円

この本を初めて手に取った読者は, きっと何かの「パンフレット」かと思うに違いない。しかし, 本書はINAXギャラリー企画委員会が企画し, 大阪市立自然史博物館が協力して開催した「植物化石展」(東京:2010年6月3日~2010年8月21日, 以降, 大阪へ巡回)のために用意されたブックレットである。展示会自体は無料であるが, このブックレット自体は1,575円ほどの価格で販売されている。

この本の最大の特徴は, その写真の精緻さと美しさにある。そのため上質紙を使用している。本書は「植物化石の世界へ」, 「化石が語る進化のドラマ」, 「古植物学・三木茂の仕事」, の3部から構成される。最初の「植物化石の世界へ」では, 植物化石を産状の違いにより, 圧縮, 印象, 鉱化, カウンターパート, 琥珀の5つに区分し, それぞれ代表的な写真が掲載されている。どの写真も美しく, 細部まで明瞭であり, その違いを容易に認識することができる。

本書の価値を引き立たせてくれるのが, 次の章の「化石が語る進化のドラマ」である。この章は, カンブリア紀から新第三紀中新世までの植物の歴史を写真とともに解説している。もちろん, カンブリア紀には明確な陸上植物化石は確認されていないので, ストロマトライトの化石が掲載されている。その写真も単なる縞模様の写真ではなく, そのドーム状の構造が徐々に大きくなっていくものを選んでいく。

次のページからは原始的な陸上植物の写真が続く。写真の横に復元図が載せてあり, どのような化石であったかを簡単に理解することができる。解説されているのは, デボン紀の化石が3点, 石炭紀が3点, 石炭紀~ペルム紀点, ペルム紀~三畳紀など時代にまたがるものが4点, 白亜紀が1点, 古第三紀が1点, 古第三紀~新第三紀にまたがるものが1点, 新第三紀が1点の総計14点の写真である。

主要な標本の幾つかの例を挙げると, デボン紀の孢子囊の化石, 石炭紀のリンボク類の孢子囊穂の化石, 木生シダの幹の鉱化化石, 最初の樹木 (アルカエオプテリス), シダ種子植物, グロッソプテリス, 球果化石, 花の化石などがあり, 重要な進化を示す化石は漏れなく掲載されている。古第三紀に関しては, 種子に翼をもつ化石が選ばれて載せられている。尚, 使用されている標本はアメリカ産のものが多い。このように, 本書は単なる図集やパンフレットとは異なり, 植物の進化をたどれるように工夫されており, 写真とあわせてみると進化の過程を容易にイメージとして捉えることができる構成となっている。

最後の章, 「古植物学・三木茂の仕事」では, 初めに古植物学者・三木 茂博士の製作したプレパレート標本の一部の写真が掲載されている。三木 茂博士は, 紹介するまでもなく, 京都帝国大学の植物分類学の大家で「メタセコイアの発見」で著名な研究者である。本章ではその半生が簡潔に語られている。博士は, 従来ムマスギやセキア属と同定されていた化石を絶滅した植物と認定し, メタセコイア属と命名した。ところが, 三木博士のこの論文出版の4年後に中国の湖北省で発見されていた未知の植物が, メタセコイア属と同じであることがわかった。これにより, メタセコイアは「生きた化石」となった。メタセコイアの発見に関しては, 中央公論社から「メタセコイア 一昭和天皇の愛した木」(斎藤清明著)が出版されている。この本では, メタセコイアの発見のエピ

ソードが詳細に記述されているので参考にしてもらいたい。現在この本を書店等でみつけることは難しいが、古書で入手可能である。三木博士の標本は大阪市立自然史博物館に保管され、プレパラート標本は、27,959枚、エタノール水溶液に保存された液浸標本は1,718瓶に及ぶ。

この本は、陸上植物5億年の歴史を簡潔に学ぶには、最適である。特に、本書に掲載されている写真は、植物進化をビジュアルで紹介するときに大いに有用となるであろう。ぜひ、一読をお勧めする。

西 弘嗣

75周年記念出版物紹介

古生物学事典 第2版

日本古生物学会 (編)

朝倉書店, 2010年6月10日発行, 576pp.

ISBN978-4-254-16265-3, 15,000円(税別)

本事典は、学会創立50周年記念事業として1991年に刊行された「古生物学事典」の続版に相当するもので、この度日本古生物学会創立75周年記念事業の一環として編集・出版されたものである。続版といっても、旧版に単に修正や補遺を加えたものではなく、趣も執筆内容も新たにした事典である。2005年に本会が朝倉書店より旧版改訂の打診を受けたのを契機に、2006年には棚部一成・北里 洋編集委員長の下で編集委員会が組織され、計画が本格的に始動した。2007年大阪年会の折に第1回編集委員会が開かれて以降、北村晃寿・西田治文・真鍋 真編集幹事らが先導して具体的な項目選定・執筆依頼を加速させ、2010年開催の学会創立75周年記念行事までの完成を目指して執筆・編集が進められてきた。最終的には、旧版の2倍以上の約1100項目を収める大部として刊行され、75周年記念行事の会場となったつくば国際会議場のブースで印刷見本が披露された。

本事典には500字程度の比較的短い項目から4000字近くに達するものまで様々な長さの項目が収められているが、全体的には記述の簡潔さと詳しさのバランスを取った「中項目主義」が採用されている。それぞれの項目の中には関連項目への参照が明示されており、編集委員長による序文の言葉を借りれば「読む事典」を目指した作りとなっている。第2版では、分類群各説等に近年の新知見が積極的に取り入れられており、旧版には見られなかった用語も頻出する。また新版では、各論のみならず、古生物学関連科学の概念用語の解説が充実しており、地質学・堆積学・古気候学・地球化学・生態学・進化生物学などの関連分野も含めた汎論的内容もある程度概観できるように出来ている。巻末付録には地質年代表と古地理図が掲載されており、読者への便が図られている。ただし、旧版にあった生物分類表や化石の採集・処理法などは第2版では採録されていない。また、旧版で78ページにも及んだ化石写真集も新版では姿を消し、代わりに2ページのみカラーグラビアが巻頭を飾っている。旧版のA5からB5に判が大きくなった分、文字も大きく読みやすくなっている。ただし、厚さも増した上にハードカバー製本となったため、持ち歩くにはずっしり重たい事典となった。

本事典の序文には、学生・研究者・教育関係者・一般読者のいずれにも役立つものを目指して事典づくりを進めた旨が書かれている。文字数の多い項目に関しては、専門的な内容がかなり詳しく記述されているものも少なくないが、各項目中に登場する専門用語のうち他の見出し項目となっている用語にはアスタリスク記号が付されており、項目間を渡り歩きながら読み進められるように工夫されている。本事典の編集に当たっては、執筆者131名よりも多い150余名の「編集協力者」(一部は執筆者と重複)に執筆内容に対するコメントを求め、これらを必要に応じて執筆者にフィードバックしており、執筆内容の質の担保が図られている。序文に続く執筆者・編集協力者リストには、多くの若手会員や会員外の専門家の名が連なるが、これは古生物学関連科学の急速な進展と拡大を反映したものであろう。編集委員会は様々な分野の専門家から構成され、執筆項目が特定の分野に偏ることのないよう、バランスに配慮されている。

事典や辞書の類は、初学者に学習の切っ掛けを与える媒体であり、学問の発展的継承には欠かせないものである。この度、75周年記念事業の一環として古生物学事典がリニューアルされたことは、日本の古生物学界にとって極めて有意義であると思われる。出来上がった事典が結果的に旧版と趣が大きく異なったのは、この20年間で古生物学関連科学が大きく進歩したことの証左である。もし今から四半世紀後に第3版が刊行されるなら、その内容は今回の第2版を大幅に改訂したものになるだろうし、そうなるようにこれからの古生物学を発展させてゆく必要があるだろう。

生形貴男

学術集会参加報告

4th International Symposium of IGCP 507 参加報告

IGCP (International Geoscience Programme) 507の第4回シンポジウム「Paleoclimates of the Cretaceous in Asia and their global correlation」が日本で開催された。IGCP 507は、韓国ソウル大学のリー・ヨンイル氏を代表者とするプロジェクトで、日本からは坂井 卓氏(九州大学)が共同代表者を務め、長谷川 卓氏(金沢大学)が日本の国内調整役を担当している。第4回の会議は、2009年12月1日から6日に熊本で実施され、天草地域北部でのプレシンポジウム野外巡検と熊本大学でのシンポジウム、御船地域でのポストシンポジウム野外巡検から構成されていた。この第4回シンポジウムを開催するに至っては紆余曲折があり、当初はインドで開催される予定だったが、諸事情によって突然キャンセルされたため、2009年の2月末になって熊本での開催が急遽決定した。開催にあたって平野弘道氏(早稲田大学)を議長とする運営委員会が組織され、早稲田大学や国立科学博物館を中心とした関係者と主催地である熊本大学と御船町恐竜博物館、ならびに熊本県下の各市町村のご尽力により、無事に熊本での開催となった。これまでの開催時期と異なる12月にもかかわらず、韓国9名、モンゴル1名、中国2名、フィリピン2名、イス1名、インドネシア2名、ロシア1名、アメリカ1名、カナダ1名(現在は日本に帰国)に日本人を加えた12カ国約70名(インドとパキスタンからの参加予定者2名は欠席)が参

加する盛況なシンポジウムとなった。

プレシンポジウム野外巡検

シンポジウム開催前の12月1日から3日は、天草諸島に分布する“中部”白亜系御所浦層群と上部白亜系姫浦層群の浅海成～非海成層を観察する巡検が組まれていた。

初日は熊本市内から天草上島まで移動し、上天草市の柵島にある姫浦層群の最下部が観察できる露頭を見学した。花崗岩類を主体とする基盤を不整合で覆う高さ15m以上の姫浦層群の露頭や姫浦層群下部の樋島層を一望できる光景はまさに壮観であった。その後、船で御所浦島へ移動し、御所浦白亜紀資料館を訪問した。資料館の館長と学芸員の廣瀬浩司氏の解説を聞くことで、御所浦地域から産出する中生代から新生代の化石への理解を深めることができた。

二日目の巡検は、御所浦島の通称「白亜紀の壁」と呼ばれる採石場での露頭観察から始まった(図1)。ここには“中部”白亜系の御所浦層群の烏帽子層と江の口層の下部が高さ約200m以上に渡って露出している。三角江(エスチャリー)堆積物からなる烏帽子層は、様々なスケールの流路充填(チャンネル)堆積物や赤色泥岩と汽水生の二枚貝や巻貝などを多産する地層が特徴的であった。

午後は天草上島龍ヶ岳町の和田の鼻まで移動し、海沿いに露出している姫浦層群樋島層の観察をおこなった。ここでは初日に見学した樋島層最下部の河川や内湾の地層を覆う海底斜面の堆積物が露出しており、斜面相に特徴的な堆積構造の他、多くの生痕化石も保存されていた。生痕化石については、奈良正和氏(高知大学)の丁寧な解説とともに、その産状を観察することができた。

最終日は午前中に上天草市北部の阿村地域の海岸で、姫浦層群阿村層を構成する海底扇状地システムに特徴的な地層を見学した。海底谷(チャンネル)を充填した斜交層理砂岩を観察し、成瀬元氏(千葉大学)の解説に聞き入った。足下にある数cmから数mオーダーの地層の観察をおこない調査地域を拡大することによって、より大きなスケールの地形を復元することができるフィールド調査の醍醐味を味わうことができた。その後、有明海に面した宇土市網田の海岸で、タービダイトや海底谷を充填した土石流堆積物などを観察し、最後に本巡検解説書の表紙にもなっている見事なスランプ構造を見学して、無事に熊本市内のホテルへと到着した。2泊3日の巡検を通じて、姫浦層群を下位から上位へほぼ順番に見学することができたことや様々な堆積構造や各堆積相についての解説を受けられたことで地層に対する理解を深めることができた。また、参加者の多くは、熱心に化石を採集しており、

重そうなザックを笑顔で背負っている方が印象的だった。

巡検中の夜は、宿舎となったホテルで毎晩、新鮮な魚介類づくしの料理の数々を参加者全員が堪能し、美味しくお酒も楽しむことができた。また、2日目の夜には、平野弘道氏の音頭で、国別(および大学別)対抗歌合戦になり、参加者との親睦を深めることができた。

シンポジウム

12月4日・5日に、熊本大学の100周年記念ホールでシンポジウムが開催された。シンポジウムは「白亜紀のアジアにおける脊椎動物の進化」と題するテーマセッションと古生物学や古気候、堆積学、テクトニクスといったレギュラーセッションからなり、ポスターセッションやワークショップも開催された。

4日のシンポジウムでは、カーク・ジョンソン氏(デンバー自然科学博物館)による「白亜紀後期の北米と東アジアの植生、動物相、気候、環境」をテーマとした基調講演に続いて、真鍋真氏や對比地孝亘氏(ともに国立科学博物館)が中心となって組織したテーマセッションがおこなわれた。テーマセッションでは、魚類から爬虫類(海生爬虫類や恐竜)、哺乳類に及ぶ各脊椎動物分類群について、アジアにおけるこれまでの研究と最新の動向を踏まえた成果が、各分野の研究者によって報告された。また、テーマセッション後には、真鍋真氏による学部生や高校生を対象としたテーマセッションの日本語解説もおこなわれ、大学院生や学部生に加えて、高校生や高校教諭、地元の地学愛好家の方が丁寧な解説に聴き入り、美しく迫力のある映像に魅せられていた。日本語解説と同時に開催されたポスターセッションでは28件の発表があり、多くの参加者で賑わった(図2)。ポスターでは、熊本大学の研究グループを中心に進められた姫浦層群の層序や化石に関する発表が多数あったほか、韓国や早稲田大学の関係者による発表が目立った。また、三枝春生氏(兵庫県立人と自然の博物館)によるポスターは、シンポジウムの直前にマスクミを賑わせた原始的な角竜の発見について報告されており、このポスターの前に多くの参加者が集まっていた。ポスターのブースにも一般の方々が多く訪れ、大学構内で開催されたシンポジウムの利点を活かしていると感じた。シンポジウム初日の最後には、マシュー・ディック氏(北海道大学)らの「東アジアにおける白亜紀のコケムシ類の概観」をテーマとした基調講演と、コケムシの現生種と白亜紀の化石種を実際に観察するワークショップが開催された。このワークショップでは参加者が実体顕微鏡下でコケムシを観察できるという貴重な経験をすることもできた(図3)。美しく規則正しく配列



図1.「白亜紀の壁」前でのプレシンポジウム野外巡検参加者の集合写真(提供:平野弘道氏)。



図2.ポスターセッションの様子。

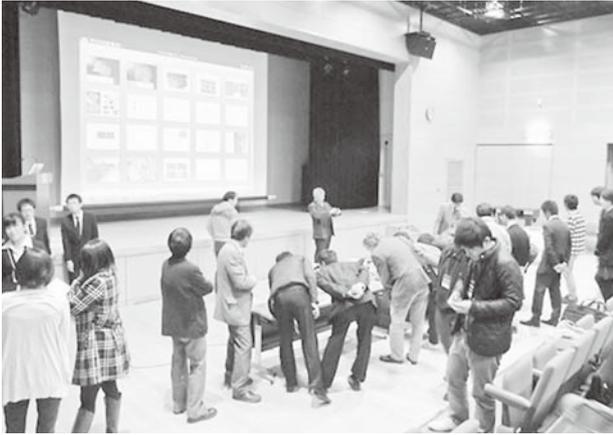


図3. マシュー・ディック氏らによるコケムシワークショップで、コケムシの標本を観察するシンポジウム参加者。

した現生種のコケムシを観察した後、ほぼ同様の構造を白亜紀の標本でもしっかりと観察することができたあの感動はなかなか忘れられるものではない。

シンポジウム初日の夜には、懇親会が熊本大学構内のくすのき会館で開催された。熊本名産の馬肉を用いた料理や熊本産のワインや焼酎なども振る舞われ、山鹿灯籠や牛深ハイヤー、おてもやんなどの熊本の踊りが披露された。

2日目は4つのレギュラーセッションで計21の口頭発表がおこなわれた。発表はもちろん、活発な質疑応答が繰り返され、参加者それぞれの専門を超えて理解し議論し合うシンポジウムに参加できたことは大変よい経験になり、おおいに勉強になった。本シンポジウムのように1会場のみで講演がおこなわれると普段参加している学会やシンポジウムとは異なった分野の講演を聴けることや、自分の専門分野以外の研究者と知り合うことができる利点があった。筆者は、昨年のもンゴルでのシンポジウムにも参加したが、白亜紀のアジアの研究の動向を、自分の専門外の広い分野にわたって得られる機会は非常に有意義であると感じた。また、野外巡検での刺激や、発表の多くがフィールド調査をベースにした緻密で詳細な研究であったため、自然科学の1分野である古生物学を学ぶものとして、野外という「現場」で観察することの重要性を改めて認識した。

シンポジウム後のプロジェクト代表者による挨拶では、こ



図4. 御船町におけるポストシンポジウム巡検の恐竜化石産地で池上直樹氏の解説を聞く巡検参加者。

のプロジェクトに初めて参加した渡部真人氏と奈良正和氏による講演が印象的であったと評され、盛況なシンポジウムを企画・運営した運営委員会や熊本大学のスタッフに対して感謝の言葉が述べられた。運営委員や熊本大学のスタッフの方々に送られた参加者からの熱く鳴り止まない拍手が、全ての参加者の感謝の気持ちとシンポジウムに満足した思いを代弁していたと思う。

ポストシンポジウム巡検

最終日となった12月6日は、午前中に御船層群の恐竜化石産地を見学し、その後、御船町恐竜博物館を訪問した。化石産地では、御船町恐竜博物館の池上直樹氏による解説の後、通常は指定記念物となっているために叩くことのできない露頭で化石採集をおこなうことができた(図4)。筆者は残念ながら一つの化石も見つけることができなかったが、参加者の中には骨片を見つけた方もおり、その醍醐味を味わうことができた。

午後からはバスで熊本市内へ戻り熊本城観光となった。加藤清正公が築城した熊本城とその見事な石垣の造りについて、観光ガイドの方から英語での説明を受け、天守閣・本丸などをゆっくりと見て歩くことができた。

今回のIGCP507の国際会議は、日本側の主催者、特に熊本大学の小松俊文氏と、熊本大学の学生スタッフの行き届いた配慮により、参加者が非常に快適で、巡検とシンポジウムの内容に集中できる環境であったことに厚く御礼を申し上げます。

大橋智之(北九州市立自然史・歴史博物館)

夜間小集会「古生物アーティストの活動～アートが紡ぐパレオ・コミュニケーション～」参加報告

2010年1月30日、滋賀県立琵琶湖博物館における第159回例会の夜間小集会として、「古生物アーティストの活動～アートが紡ぐパレオ・コミュニケーション～」が開催された。本小集会は、哺乳類化石の研究者である荻野慎太郎氏(産総研; 現京都大学霊長類研)、古生物復元画家の小田 隆氏(成安造形大)、古生物復元模型作家の徳川広和氏(きしわだ自然友の会)の3名が世話人として企画された。会場には約100名の参加者が集まり、近年の夜間小集会にはない大規模な集会となった(図1)。琵琶湖博物館では2010年1月の1ヶ月間、企画展として「古生物の復元—科学と芸術が会うところ—」が開催されており、夜間小集会の世話人でもある小田氏と徳川氏、谷本正浩氏による復元画や模型が展示されていた。また、学会のポスター発表においても、復元をテーマとした3件の発表が行われた。そのため、今回の小集会には復元のテーマに興味を持つ人が多く集まったものと思われる。

小集会ではまず最初に、荻野氏により本小集会を企画した目的が話された。荻野氏によれば、古生物の復元画や模型を制作しているアーティストは、研究者とは異なる視点で古生物の実態を多くの人達に伝えることができ、古生物学を普及するという面でもとても重要な役割を担っていると思われる。ただし、彼らと研究者らは密接な連携を取り合っており、お互いの意見をぶつけ合う場が大切で、世話人の3名はこのきっかけを作りたいという目的でこの小集会を企画されたとのこと



図1. 世話人の小田氏(左上), 徳川氏(中上), 荻野氏(右上).
下は徳川氏の説明に従って恐竜の復元を体験している参加者たち(写真提供: 高桑祐司氏, 黒須弘美氏).

である。

講演ではまず徳川氏に、博物館などでやっている普及活動の様子を再現してもらった。参加者に恐竜の頭骨の線画とトレーシングペーパーが配られ、頭骨から肉付けをして、目や鼻などを描き入れ、恐竜の頭部を復元していくという内容である。徳川氏は、小気味よいトークと笑いで参加者を楽しませながら復元画の作り方を説明していった。参加者に実際に復元画を作ってもらうことで、骨格の特徴や恐竜の復元について学んでいってもらうことがこの活動の目的ということである。復元模型作家として知られる徳川氏の普及活動の様子を目の当たりにし、参加者に興味を持たせながら学習させるという手法が参考になった。

次の小田氏の講演では、最近の作品であるアケボノゾウの復元図の作成手順が紹介された。小田氏は自ら生物の筋肉や骨格の研究をしており、骨格からより正確な復元をしようという熱意が伝わる講演であった。また、復元には研究する側、表現する側の意見がそれぞれあり、間違っただ復元がなされることもあり、誰の研究に基づいた復元なのかをはっきりさせることが大切という指摘があった。小田氏の作品は書籍や博物館でその多くを見ることが出来るが、試行錯誤をしながら制作する風景を見ることができ、その時間と労力のかけ方を改めて認識することが出来た。

世話人3人の講演の後にはアーティストと参加者との議論の場となった。研究者は、アーティストに古生物を復元してもらうことで一般への普及の促進を期待している一方、逆にアーティストは研究者に何を求めるのか、という質問が出たが、それに対して小田氏から、古生物学の進展や普及という同じ目的を持つ者として、アーティストと研究者はもっと連携を持ってお互いを尊重し合うという考えが必要という返答があった。日本におけるアーティストはまだ少数で活動していることが多いが、海外のアーティストは職業として成立しているほど認知されているようである。一方、徳川氏から、古生物を多くの人に楽しんでもらうための機会を一緒に作ってほしいという提案があった。普及活動を活発に行っている徳川氏からの意見は、研究者側にも強く印象に残るものと思われた。また、古生物の復元に関連した仕事として、研究者とアーティストのほか、製品の監修者、販売者などがあるが、これらについても同じ机で一緒に議論することで、より正確な成果を作成することが重要とのことである。ミュージアム

ショップについても、売ればどんな製品でも販売していいというわけではなく、より忠実に復元された作品の販売を希望し、販売側の意識の向上にも期待したいという意見があった。

この夜間小集会には、小田氏や徳川氏のほかに横山 隼氏(シルバーアクセサリー作家)、守亜和由紀氏(動物造形作家)、田辺高憲氏(動物造形作家)という古生物復元のアーティスト、普及活動を活発に行っている方が多く参加されていた。

私自身これまで古生物の復元という研究に取り組んでいたが、アートという方向から復元を行っている多くのアーティストも学会に参加されていることを改めて認識することが出来た。アーティストたちは古生物アートの手法と研究成果との連携をはかることで、誰もが知ることが難しい絶滅した古生物を生き生きと復元することを目的として活動している。私には研究者とアーティストの成果が融合しあうことにより、古生物学の面白さが多くの人に伝わっていくのだと感じられた。また、私たちは、古生物学を多くの人に知ってもらい、楽しんでもらうというお互い同じ目的に向かっており、科学と芸術という違いを強調する必要もないのではないかと思われた。今回の小集会は始まりであり、今後の研究者とアーティストとの緊密な連携が期待される。

中島 礼(産業技術総合研究所)

「第3回国際古生物学会議」参加報告

はじめに

2010年6月28日から7月4日にかけて第3回国際古生物学会議(Third International Palaeontological Congress: IPC3)がイギリス・ロンドンのインペリアルカレッジ(Imperial College: 図1)と自然史博物館(Natural History Museum)にて開催された。IPCは、過去に、シドニー(IPC1: 2002年7月)と北京(IPC2: 2006年6月)で開かれており、4年ごとに開催されている。IPC3の参加者は、約45カ国700名以上にも上った。日本からは、日本古生物学会が旅費を助成した若手会員5名を含む19名が参加した。

6月28日には、受付を済ませた参加者がアイスブレイクパーティーに招かれた。7月1日には、*Diplodocus*の骨格標本が展



図1. インペリアルカレッジで行われたシンポジウム「Macroevolution and the Modern Synthesis」の講演会場の様子。



図2. カンファレンスディナーの様子。ロンドン自然史博物館ホールの *Diplodocus* を囲んでテーブルが並べられている。

示されている自然史博物館のセンターホールでカンファレンスディナーが催された(図2)。普段なら来館者として眺めることしかできない *Diplodocus* をテーブルから見上げながらゆっくり食事を楽しむという体験は、今回の会議ならではのことだろう。

普及講演やシンポジウム、ワークショップは6月29日～7月3日に行われた。シンポジウムは、25のセッションで構成され、ワークショップのみを集めた7月1日以外の各日に割り振られた。各シンポジウムのタイトルは以下の通りであった。

1. The Lyell Symposium — Comparing the rock and fossil records: implications for biodiversity studies
2. Macroevolution and the modern synthesis
3. The micropalaeontological record of global change
4. Microfossil contribution to understanding the tree of life
5. The acquisition, curation and conservation of palaeontological collections
6. Palaeontological data analysis
7. Origin, evolution and phylogeny of the Brachiopoda
8. Great Ordovician biodiversification event: causes and consequences
9. Devonian bioevents: timing, palaeoecological and evolutionary patterns
10. Geomicrobiology at critical periods of Earth History
11. Chemosynthetic communities: palaeoecology, systematics and evolutionary history
12. Biotic recovery after mass extinction events
13. Molecular palaeobiology: molecular clocks, evolutionary rates and geological dates
14. Modelling the climate of Palaeozoic Earth
15. Rates of morphological evolution: size, shape, and character change in fossil lineages
16. Functional morphology at the intersection between biology and engineering
17. From teeth to Tibet — new techniques and views on mammals and Cenozoic environmental change
18. Major transitions in the early evolution of life
19. Taphonomy of skeletons and soft tissues
20. The wood from the trees: phylogenetic approaches to large-scale events in the history of life

21. Mechanisms that guide evolutionary change for vertebrate dentitions: co-option of ancient patterns
22. Recent discoveries and advances in the palaeontology of China
23. The origin of life on land and its geological consequences
24. Time-specific facies: the colour and texture of biotic events
25. Open Symposium

それぞれのシンポジウムは非常に充実しており、1日に8会場で130題以上の口頭発表が行われた日もあった。また、ポスター発表については、各シンポジウムの口頭発表が開かれた日の夕方、1時間ずつのコアタイムが設けられた(図3)。

シンポジウムの報告

化石記録やタホノミー、データ解析、大進化、機能形態学などを主題としたセッションが多く聴衆を集めていた。タホノミーのセッションでは、化石標本から化石化過程を考察するだけでなく、現生の生物を用いた腐敗実験の結果などから化石の保存状態について理解しようとする研究も見られた。これらの研究では、主に魚やネズミ、鳥などの脊椎動物が用いられ、化石化が生物の腐敗と保存とのタイムレースであることに着目している。その他にも、複数の手法を組み合わせた研究が広く行われていることが印象的であった。例えば、元素の同位体比分析などの様々な地球化学的手法や観察に基づく学際的な研究が進められており、それによってより高い精度での議論が可能になりつつある。そうした多面的アプローチが様々な分野で定着していることを実感した。

また、機能形態学分野の進展には驚かされた。生物の形態を測定するだけでなく、測定した形態を力学的に解析することで、その機能を定量的に解明するという、従来よりも一歩



図3. ポスター会場の様子。活発な議論がなされている。

進んだ段階へと発展していた。日本においては、このような研究例は必ずしも多くはないものの、Plenary SymposiumのEmily Rayfield博士の講演で椎野勇太博士（国立科学博物館）の腕足類を用いた研究例が引用されるなど、日本の機能形態学存在感を感じた。

セッション後の17時15分から18時15分の間に行われたポスター発表では、口頭発表に比べて発表数が少なかったものの、会場でバーが開き、おのおのが飲み物を片手に和やかな雰囲気の中で活発に議論していた。著者のポスターにも多くの参加者が訪れ、様々な意見を頂くことができた。

7月1日に行われた総会では、IPA (International Palaeontological Association) の人事で北里 洋氏が副会長の一人に選ばれた。次回、4年後のIPC4の開催国は未定である。

おわりに

IPC3では、イギリスで開催されたためか、ヨーロッパやアメリカからの参加者がほとんどであったが、中国の古生物学に関するシンポジウムが設けられていたこともあり、中国からの参加者も多かった。一方、日本人、特に学生の参加者はそれほど多くはなかった。日本人である私にとって、言葉の壁は決して低くはない。しかしながら、研究手法やアイデアに限って言えば、思ったほどの違和感はなく、むしろ世界が身近に感じられた。筆者はこの度、自分のような大学院生がIPCのような国際会議に積極的に参加することの重要性を改めて感じる事ができた。最後に、大会の運営を行ったIPAの皆様を始め、関係者の方々に深く御礼申し上げます。

森本このみ（静岡大学大学院理学研究科地球科学専攻）



図1. 75周年記念グッズ。左上のNipponitesストラップは横山 隼氏（RC GEAR）制作（写真の幅15mm）。右上のエコバッグは松本結樹氏（成安造形大学）のデザイン。下のTシャツ（写真提供：中島 礼氏）のデザインは、左から上松佐知子氏、山本彩乃氏、町田倫子氏による。

日本古生物学会創立75周年記念行事

去る6月12日(土)・13日(日)に筑波大学で2010年年会・総会が開催されたが、それに先立つ10日(木)・11日(金)の両日に、つくば国際会議場で日本古生物学会創立75周年記念行事が執り行われた。この記念行事は、2008年千葉年会時の評議員会において当時の小笠原会長が実行委員会を立ち上げて以来、2年間にわたって準備を進めてきた記念事業の一環であり、国際古生物学協会（International Palaeontological Association）と独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターの後援を得て開催されたものである。学会の周年行事は、50周年を国立科学博物館で行って以来25年ぶりであり、若手会員にとっては初めての機会となった。

75周年記念事業には、この度開催された記念行事のほかに、記念グッズ（Tシャツ、ストラップ、エコバッグ）の制作や、古生物学辞典第2版（朝倉書店刊）の編集、会員名簿の発行などが含まれており、来賓を含めて合計182名に上った記念行事への参加者には、記念品としてNipponitesストラップとエコバッグが無料配布された（図1）。また、会場の休憩室では、公募によってデザインを決めた3種類のオリジナルTシャツが1枚2,000円で販売されたが（図1）、会場限定販売のためか会期中に完売となった。

記念行事初日の6月10日には、午後から講演会、式典、祝賀会が行われた。記念講演及び普及講演の演者・演題は以下の通りであった（図2）。

記念講演：日本古生物学会前会長 小笠原憲四郎（筑波大学） 日本古生物学会過去四半世紀と今後の発展を期して

記念講演：中国古生物学会副会長 周 忠和 中国古生物学会の最近の進展と展望 [Prof. Zhonghe Zhou (Institute of Vertebrate Paleontology and Paleoanthropology). Remarks on recent advances and perspectives in Chinese paleontology]

記念講演：韓国古生物学会会長 김 정률 韓国古生物学会の過去、現在、未来 [Prof. Jeong Yul Kim (Korea National University of Education Cheongwon). The past, present and future of paleontology in Korea]

普及講演：D. E. G. ブリッグス 驚異の化石、地球生命史を覗く窓 [Prof. D. E. G. Briggs (Yale University). Extraordinary fossils: Windows on the history of life on Earth]



図2. D. E. G. ブリッグス博士による普及講演。



図3. 記念式典における加瀬会長の式辞。

小笠原前会長の講演（日本語）は通常の年会における会長講演に位置付けられるものであるが、日本古生物学会の歴史を概観した上で古生物学会の現状を分析する内容であった。周 忠和中国古生物学会副会長による講演（英語）では、胚化石で知られる瓮安（Weng'an）動物群や、カンブリア爆発を記録した澄江（Chengjiang）動物群、羽毛恐竜で名高い熱河（Jehol）生物群などのラーゲルシュテッテンにおける近年の発見についてのレビューがあった。一方、召 正喜韓国古生物学会長による講演（英語）では、伝統的な古生代化石の研究に加え、中生代や新生代の化石の研究が増えつつある韓国の近況が紹介された。ブリッグス博士による普及講演（英語）は、ラーゲルシュテッテンから産する例外的に保存の良い化石の研究について平易に解説したもので、軟体部の構造がどのような過程で保存されるのかについても言及されていた。

一連の講演会に引き続いて、学会創立75周年記念式典が執り行われた。本会の加瀬会長による式辞（図3）の後、来賓の中国古生物学会周 忠和副会長、韓国古生物学会召 正喜会長、筑波大学赤平昌文副学長、日本地質学会宮下純夫会長、日本自然史学会連合西田治文代表より祝辞を頂き、これに高柳名誉会員による挨拶が続いた。加えて、下記の団体より祝辞・祝電を頂いたことが紹介された。

祝辞：一般社団法人日本地球惑星科学連合（会長 木村学）

祝電：独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター（代表 加藤碩一）

祝電：日本分類学会連合（代表 伊藤元己）



図4. 藤原ナチュラルヒストリー振興財団への感謝状の贈呈。



図5. 記念祝賀会の様子。

また、式典では、藤原ナチュラルヒストリー振興財団による自然史分野への研究支援などの功績に対して、日本古生物学会より感謝状が贈呈された（図4）。式典終了後には、出席者が国際会議場ホールの階段に集まり、記念撮影を行った（本号口絵）。

式典後の夕方には、国際会議場の1階で、来賓を交えて立食形式の記念祝賀会が開かれた。間嶋庶務の司会進行のもと、加瀬会長の挨拶に続いて平野元会長が乾杯の音頭を取り、その後およそ2時間にわたって参加者同士が交流を深めた。その間、鎮西・長谷川両名誉会員に加え、招待講演者のG. J. ヴァーメイ博士、C. K. ボイス博士、D. E. G. ブリッグス博士や、Paleontological Research誌の英文校閲者でこの度貢献賞を受賞したM. ジャナル博士、さらには開催校を代表して小笠原前会長が次々と登壇し、挨拶・祝辞を述べた。年会の懇親会とは別立てであったにもかかわらず様々な世代から約110名の参加を得て、祝賀の宴は盛況を呈した（図5）。

記念行事二日目の11日（金）には、朝より国際シンポジウム「The Mesozoic Revolution: a global biological transformation」（International Palaeontological Association後援）が開催され、多くの参加者が会場を埋めた（図6）。カリフォルニア大学デービス校のG. J. ヴァーメイ博士による基調講演をはじめ、シカゴ大学のC. K. ボイス博士や国内の会員による講演計9件があった。演者・演題は以下の通り。

Geerat J. Vermeij (University of California, Davis): The energetics of modernization: The last one hundred million years of biotic evolution.

Hiroshi Kitazato (Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology) and Nobuhiro Kotake (Chiba University): Deep-sea ecosystem changes in parallel to the plankton evolution during the Mesozoic.

Yasuhiro Iba (National Museum of Nature and Science, Tokyo) and Shin'ichi Sano (Fukui Prefectural Dinosaur Museum):



図6. 記念シンポジウムの会場の様子。

The mid-Cretaceous biogeographic revolution in the Pacific: A consequence of changes in oceanic gateways. Taketeru Tomita (University of Tokyo): Change in the trophic level of the lamniform sharks in the middle Cretaceous. Charles Kevin Boyce and Jung-Eun Lee (University of Chicago): The impact of Cretaceous angiosperm evolution on terrestrial climate and productivity.

Hikaru Uno (University of Tokyo): Ecological reconstruction of vertebrates based on stable isotope analysis of enamel: Possibility of application to Mesozoic marine reptiles.

Yuichiro Kashiyama, Shinya Nomoto (University of Tsukuba), Nanako O. Ogawa, Yoshito Chikaraishi, Hisami Suga, Hiroshi Kitazato and Naohiko Ohkouchi (Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology): Molecular-specific $^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$ analyses of fossil biomolecules as tools revealing the biogeochemical evolution behind the Mesozoic marine revolution.

Robert G. Jenkins (Yokohama National University) and Andrzej Kaim (Institute of Paleobiology, Polish Academy of Science): Evolutionary history of hydrothermal and seep chemosynthetic communities.

Kazuyoshi Moriya (Waseda University), Hiroshi Nishi (Tohoku University) and Hodaka Kawahata (University of Tokyo): Evolution of ocean thermal structure in the Cretaceous greenhouse: Meridional temperature distribution and putative glaciation in the supergreenhouse.

ヴァーメイ博士による「中生代の海洋変革」は、当初、捕食圧の増大に伴う海洋動物の生態的変化を骨子として提唱されたものだったが、これを陸上生態系の変化から地球表層環境の変動まで包括する概念に拡張したのが本シンポジウムの表題「The Mesozoic Revolution」である。本シンポジウムでも、古生物の生理や食性、古生態系、古生物地理から古気候・古海洋に至るまで、様々な観点から話題が提供された。質疑応答の時間を十分長く取るような進行だったため、使用言語が英語であったにもかかわらず質問・討論が活発で、最後の総合討論も活況を呈した。記念シンポジウムは、予定通り16:45に盛会裡に終了し、二日間に亘った記念行事は幕を閉じた。

なお、以上の学会創立75周年記念行事の様子は、日本古生物学会のホームページ (<http://www.soc.nii.ac.jp/psj5/75thevent/ceremony/ceremony.html>) でも紹介されている。

生形貴男

小笠原), 松岡 (→遠藤), 柳沢 (→甲能)
書記: 中島, 和仁

報告事項

常務委員会報告 (間嶋)

庶務 (間嶋)

- 75周年記念シンポジウムおよび記念式典への後援について、産業技術総合研究所より承諾を得た。
- 第3回International Palaeontological Congress (IPC3) ロンドン大会参加への助成案内を会員向けメールで送付した。
- 第7回メール常務委員会(会員の入退会)議事録案(修正版)を送付した。
- 筑波大学より依頼のあった「学協会著作権ポリシーデータベース (SCPJ)」に回答した。
学協会誌名:化石, 発行元学会名:日本古生物学会, 言語:日本語, ポリシー:Blue (査読後論文のみ認める), 印刷版の利用:可, 公開場所:機関リポジトリ, 公開条件:猶予期間を遵守すること, 発行後1年経過後, 備考:印刷版のみ
学協会誌名:Paleontological Research, 発行元学会名:日本古生物学会, 言語:英語, ポリシー:Blue (査読後論文のみ認める), 印刷版の利用:可, 公開場所:機関リポジトリ, 公開条件:猶予期間を遵守すること, 発行後1年経過後, 備考:印刷版のみ。
- 第2回評議員会議事録(修正版)を送付した。
- 第8回メール常務委員会(会員の入退会)議事録案(修正版)を送付した。
- 2010年刊行予定の古生物学事典第2版編集委員会より、ニッポンテスのロゴ(1991年に刊行された古生物学事典の表紙に用いられたもの)の第2版への転載許諾の申請があったので、これを許可した。
- 学士院より、速水 格君の推薦書及び関係書類の受領書を受け取った。
- 関事務局担当の「給与支払証明書」を発行した。
- 3月30日に間嶋庶務が事務局に出向き、基金口座の解約手続きを行った。
- 学会で発表したポスター等を公の場等で使用する際に学会への許可が必要かどうかの問い合わせがあり、許可は必要ない旨回答した。
- 特定非営利活動法人地質情報整備・活用機構主催「新資格ジオ・マスター」への後援の了承し、書類を地質情報整備・活用機構資格検定事務局へ送付した。
- 国際惑星地球年日本事務局より、本会の後援に対して感謝状を受け取った。
- 評議員に日本学術振興会賞への推薦依頼を行った。
- 第9回メール常務委員会議事録を送付した。
- 75周年記念事業のTシャツデザインが決まった旨報告があった。
- 近藤行事係から科研費研究成果公開Bが採択された旨連絡があった。
- 2010年第3回IPC ロンドン大会への若手会員参加補助の審査結果を採択者に連絡した。
- 75周年記念事業招聘機関(藤原ナチュラルヒストリー財団, 文部科学大臣, 筑波大学学長, 地球惑星連合代表, 自然史学会連合代表, 地質学会会長)に招待状を送付した。
- 2011年International Commission on the History of Geological Sciences (INHIGEO) 日本大会への後援の了承について、書類をINHIGEO日本開催準備委員会事務局へ送付した。その内容をホームページに掲載した。国際地質学史委員会(International Commission on the History of Geological

学会記事

日本古生物学会 (2009・2010年度) 第3回定例評議員会議事録

日時: 2010年6月9日(水) 13:30 - 17:30

場所: 筑波大学 大会会館第5会議室

出席: 加瀬会長, 安達, 生形, 遠藤, 小笠原, 北里, 甲能, 佐藤, 棚部, 西, 長谷川, 平野, 平山, 前田, 間嶋, 矢島

欠席: 天野 (→間嶋), 安藤 (→平山), 植村 (→加瀬), 大路 (→棚部), 近藤 (→前田), 富田 (→平野), 真鍋 (→

- Sciences : INHIGEO) 日本大会が, 2011年8月2日~5日に愛知県豊橋市の愛知大学にて開催される. 詳細は, <http://www.inhigeo-jp.org/index.html>を参照.
21. 採択された平成22年度科研費研究成果公開Bの交付申請書に会長名を署名後, 文部科学省に郵送した.
 22. 日本地球惑星連合2010年大会での日本古生物学会の出席申込を行った.
 23. 学会賞のメダル作成を横山氏に発注した.
 24. 学会の賞関係の賞状用紙を剣持東文堂に40枚発注した.
 25. 第10回メール常務委員会議事録を送付した.
 26. 2010年第3回IPC ロンドン大会への若手会員参加補助費の振込みが完了した.
 27. 地惑連合の団体情報を地惑連合に送付した. この際, 学会の連絡委員は庶務係が担当することとした.
 28. 記念式典および総会で授与する賞状の文面確認を行った.
 29. 学会HPの学会役員名が更新されていないとの指摘があり, 更新を行った.
 30. 文部科学省より大臣の75周年記念式典への出席と祝辞の見送りの通知があった.
 31. 学術著作権協会より著作物のホームページ掲載の権利委託契約について問い合わせがあり, 委託契約を検討しないことを回答した.
 32. 学会賞, 学術賞, 論文賞, 貢献賞, 感謝状の筆耕を, (株)三美堂に発注した.
 33. 記念式典および総会会場において, 朝倉書店によって「古生物学事典」を販売することを承認したことを, 朝倉書店の担当者に連絡した.
 34. 千葉大学名誉教授前田四郎元会員のご逝去の連絡が松本会員からあり, 本学会への入退会日, 役職等の問い合わせに回答した.
 35. 定例評議員会の開催通知を評議員向けにメールで通知したが, 一部の評議員から連絡を早くして欲しいとの要望が出され, 今後善処する旨回答した.
 36. 学会事務局から75周年記念大型ストラップの作成を横山氏に発注した.
 37. 会員から地球惑星科学連合の夜間小集会の案内を学会のメーリングリストでの通知依頼があったが, 対応できない旨を会長から回答した.
 38. 東大の永原氏より地球惑星連合同大会での「日本学術振興会による科研費・特別研究員制度に関する説明会」を学会メーリングリストで周知するよう依頼があったが, 学会メーリングリストで周知すべき案件ではないと判断した.
 39. 4件の貢献賞の内定と総会への出席依頼を発送した.
 40. 大学評価・学位授与機構から, 本学会から推薦した機関別認証評価に係る専門委員候補者の見送りに関する通知があった.
 41. 後援依頼のあった京都大学でのBriggs教授の講演会について, 承諾書を送付した. 講演者: Prof. Derek, E.G. Briggs (Yale Univ.). 演題: The taphonomy of soft tissues (軟体部保存のタフノミー). 期日: 2010年6月8日(火) 16:30~18:00. 場所: 理学研究科1号館5F・563共同大会議室(80~100名). 共催: 京都大学総合博物館, 地質学鉱物学教室. 後援: 日本古生物学会.
 42. 「古生物学事典」の割引販売案内を古生物学会HPに掲載した.
 43. 公募ガイド社から同社が出版する公募ガイド誌へのTシャツコンペ結果と採用作品画像の掲載依頼があり, 会長判断で許可した.
 44. 小笠原評議員より, 75周年記念式典, シンポジウムの横断幕, 立看板2枚の3社からの見積もり(シバサイン社が60,900円, Zipshop社が99,750円, サトー企画が102,900円)

を検討し, シバサイン社に発注した旨の報告があった. また, 生花は, 会議場出入りの業者に発注(見積もり20,000円)した. 看板と生花の合計は, 総額80,900円となった.

45. 横山氏より学会賞メダルが庶務に納品され, 記載事項の確認を行った.

渉外(真鍋)

1. 平成22年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)は4年間(平成22年度・23年度が140万円+24年度・25年度が130万円)で4年間の総額540万円の申請を行っていたが, 4月1日付けで平成22年度単年度で110万円の交付内定通知を受けた. 事務局が銀行口座を新規に開設し, 渉外係がPR14巻の直接出版費に充てる内容で, 4月28日に交付申請書を提出した.
2. 75周年記念式典で招聘する中国, 韓国の古生物学会代表者の来日日程を確定, 航空券を手配した. また, 中国に関しては招聘ビザの申請書類を準備中. 来日される方のお名前, 講演題目などについては行事係のプログラム案を参照.
3. 日本学術振興会からPR出版助成補助金報告書の誤記載の指摘があり, 修正して提出した.

会計(佐藤)

1. 5月24日(月), 学会事務局において会計監査を行い, 平成21年度の収支決算書および財産目録等が適正であると認められた.

行事(近藤)

1. 第159回例会(琵琶湖博)報告
 - 参加者数は, 名誉会員4名, 一般会員181名, 学生会員93名, 友の会会員1名, 招待者(特別講演招待)1名, 報道関係者1名, 会場スタッフ24名の計305名であった.
 - 収入は, 参加費637,000円, 出版物販売2,000円の計639,000円であった. 支出は, 会場費(アルバイト代など)378,000円, 送料・振込料5,460円, 事務局関連(プログラム印刷費など)346,002円であった. 収支は90,712円の赤字であった.
 2. 75周年記念行事および2010年年会・総会(筑波大学)準備状況: 講演要旨締めきり4月9日(金). 記念式典やシンポジウムについて, 学会ホームページと会員向けメールにより周知する. プログラムの発送は5月連休明け頃を予定している. 5月中旬にはHPに掲載するとともに, 会員に郵送予定. なお, プログラム作成の労力軽減のため, 形式を少し修正した. 5月中旬にはHPに掲載するとともに, 会員に郵送予定. 行事委員幹事にポスターを作成依頼中. 近日中にHPに掲載するとともに, ファイルで評議員メンバーや各大学の中心メンバーに送信予定. 2010年年会の講演予稿集は近日中に納品され, 会場校の筑波大学に送付する予定.
 3. 第160回例会(高知大学)準備状況: 2011年1月28(金)~30日(日): シンポジウム, 個人講演, 懇親会, 普及講演会など, すべて高知大学朝倉キャンパスで開催予定. これまでにシンポジウム案(松本達郎名誉会長追悼シンポジウム「白亜紀研究の進展」)の申し込みがあった. 科研費研究成果公開Bの採択が内定した旨連絡があったので, 交付申請書を提出した. 高知県観光コンベンション協会に助成金を申請した. 採択されたら, ポスターボードの設置など, 会場設営に使用する予定.
 4. 第161回例会準備状況
 - 現在のところ申し込みはない.
- #### 企画・広報(甲能)
1. 古生物学会HPのリンクや内容の修正を行った.
 2. 半年後を目指して内容をリニューアルする予定で, 原案を検討中である.

国際交流（遠藤）

1. 連合大会期間中の5月25日(火) 17:30～18:30に国際学術委員会が開催された。

電子ジャーナル（真鍋）

1. UniBio事務局の人員が縮小される予定であるため、学会としての対応策（本学会が主体的に事務作業を代わって行うなど）を考える必要があるとの報告があった。

友の会（大花）

1. 化石友の会では、3月発刊予定の「化石」発送時に2010年度会費の請求を予定している。
2. 現在の会員は75名で、5月末までに会費請求をおこなう。
3. 学会図書の利用を行うための管理担当者を確認中である。

会員の入退会報告（前田）

前回の評議員会（2009年1月28日）以降、入会28名（森本このみ君、吉池高行君、岡野真以子君、飯泉克典君、川合嘉博君、藤森恒至君、住田徳蔵君、上田聡美君、高木悠花君、渡辺順也君、山本倫弘君、岩出 昌君、黒滝啓介君、東 亮一君、林 圭一君、湯川弘一君、遠藤孝義君、井上 諒君、楠 慧子君、佐伯健太郎君、星木勇作君、原田吉樹君、青塚圭一君、増田 進君、後藤隆嗣君、古田士俊夫君、伊藤 光君、高間幸子君）、退会11名（石橋 毅君、石井友樹君、橋本秀雄君、舟川 哲君、石井 悟君、BERNARD Aurelien君、ジンマウン マウン君、渡邊和恵君、関戸信次君、井上英二君、岡田尚武君）、逝去1名（鈴木康司君）、退会（海外）1名（曾根正敏君）があった。2010年6月9日現在の会員数は1,080名（前回評議員会比+12名）である。

編集状況報告**欧文誌（西）****1. 編集状況**

- Vol. 14, no. 1（2010年4月30日）：Original Article 5編、Short Note 1編、84ページ。発刊済み。
- Vol. 14, no. 2（2010年6月30日）：第2校校正中。

2. Associate Editorの入れ替え：Associate Editorは投稿論文に関し実質的な編集の責務を負い、その負担は大きい。投稿論文の分野傾向を加味し、以下の通り、4名のAssociate Editorの入れ替えを行った。

（旧）植村和彦、近藤康生、西田治文、柳沢幸夫

（新）生形貴男、遠藤一佳、前田晴良、山田敏弘

3. 投稿状況：過去1年間にOriginal Article 23編、Short Note 3編、計26編の原稿の投稿があった。投稿は最近増えていない。この6月にもImpact Factorが付くことにより状況が改善することを期待しているが、積極的な投稿を促すことが必要である。なお、今回の記念国際シンポジウムの特集をPRに掲載する予定。

化石（生形）

1. 87号を3月末日に刊行。1編の口絵、6編の論説、1編の解説、1件の追悼文、3件の書評、2件の学術集会参加報告を収録。刷り上り120頁。
2. 88号は75周年記念特集を企画。ばれおんとエッセイ（論壇）、学会史、記念式典記事・写真などを掲載予定。
3. 88号以降には、現在までに論説3編（受理1、修正中2）、解説4編（受理4、うち2は75周年特集）、学術集会参加報告2件（受理2）、書評1件（受理）の投稿があった（別紙参照）。加えて、総説1件、解説3件（75周年特集）、書評2件が依頼済み。
4. 78号以降の論説・解説・記事等を対象に、各連絡著者に対して一時的にオンラインストレージにアップしたPDFのダウンロード案内を送信した。ただし、出版後1年以内の

86、87号については、出版後1年以内に当該コンテンツをWebで公開したりFTPサーバ上に置いてリンクを貼ったりしないこと、多数の研究者仲間に一斉送信するような公衆送信に近い方法で配信しないことを明記した誓約書への承諾・署名を求め、これに応じて電子別刷請求書を提出した8名の連絡著者にPDFを送信した。

5. 電子ジャーナル試験ページを作成し、72号以降のPDFをアップした。Media FireからMedia Proへの試験的アップグレードに\$9を支払った。
6. 広告掲載の新規申し込みが1件（1/2頁、(株)ホワイトラビット）あった。

特別号（遠藤）

1. 投稿がない状況が続いている。

連合・学術会議報告**地球惑星科学連合（加瀬、北里、西）**

1. 5月26日に第2回学協会長会議が開催された。公益法人への申請準備状況、学術会議で進めている大型マスタープランの動向、2010年連合大会の講演数が前年と比較して大幅に増加したことが報告された。
2. 5月26日に開催された第2回定時社員総会にて承認された第2期決算、第3期の事業計画と予算、定款の変更、法人運営基本規定改正、理事選任について報告された。地球生命科学セクションの理事のうち、本会からは川幡穂高君と西 弘嗣君が選任された。
3. 今後の地惑連合の今後の計画として、連合大会における国際セッションを50%以上にすること、連合のe-journalの発刊について紹介された。
4. 地球生命科学セクションでは、EGUのBiogeoscienceと連携した国際セッションを開催し、2名の研究者を招聘した。今後もEGUとの連携を続けることが報告された。

学術会議（北里）

1. 第四期科学技術基本計画に向けた要望が総合学術会議に提出された。計画の骨子が作成され、今後議論を進めていく予定である。
2. 「日本の展望—学術からの提言」が4月5日の総会にて承認された。これから各学協会で議論を始め、今後の研究方針を決めることになる。
3. 日本学術会議のあり方について、アカデミーとしての機能強化、政府との連携強化について議論されている。
4. 大型研究マスタープランについて、地球生命科学分野では「全地球生命史解読と地下生命圏探査計画」がリストアップされている。本会では将来計画委員会で検討することとなった。

自然史学会連合（甲能）

1. 11月28日に岩手県立博物館において、第16回自然史学会連合講演会が開催される予定。内容は検討中である。
2. 学術会議に学界の意見を反映するため、加盟学会の学術会議会員・連携会員の名簿の活用を早急に検討する予定。
3. 博物館部会において、博物館法を取り巻く問題や学芸員の研究環境に関わる問題を議論する予定。
4. 自然史学会連合では定期的に運営委員会が開催されているが、審議の内容が各学協会に周知されていないことから、議事録を各学協会に送付する要望を出した。

日本分類学会連合（佐々木；代理加瀬）

特になし。

各種委員会報告**将来計画委員会（75周年記念事業実行委員会；加瀬）**

1. 75周年事業の予算案の大枠を検討した。詳細については次回以降の常務委員会で継続審議する。予算案は、次回評

議員会の議を経て、次回総会に諮ることになる。

- Briggs教授の旅程変更に伴う航空券代金の増額支出を承認した。
- 記念式典および記念シンポジウム招聘予定者の招聘条件(日当, 宿泊代金, 講演謝金)について, 以下の原案を承認した。

日当および宿泊代金は6月9日(水)からのつくば市滞在日数に応じて支払う。ただし, 6月9日については, 旅程の関係でつくば市以外で宿泊する場合は, 宿泊費の実費を支払う。日当は1日10,000円。宿泊費は学会からホテルへ支払う。なお, 今回の75周年事業の記念講演に限り, 中国古生物学会会長, 韓国古生物学会会長, Briggs教授, Vermeij教授, Boyce博士に, それぞれ30,000円の講演謝金を支払う。

- 記念式典来賓予定者(国内機関)および感謝状贈呈対象者(藤原ナチュラリスト財団)への招待状を, 庶務が作成し送付することとした。
- 以前から感謝状の贈呈を検討していたMartin Janal氏について, 評議員からの推薦がなかったので今のところ贈呈対象になっていないことを確認した。
- 年会・総会の講演予稿集とは別に, 75周年記念式典で配布する冊子(式次第, 会長講演, 中国古生物学会会長および韓国古生物学会会長の講演, Briggs教授の招待講演の要旨)を作成することとした。これと同じ内容のものを講演予稿集にも綴じ込む。
- 75周年記念式典およびシンポジウムのポスターを近藤行事係が作成し, PDFとして関係者・機関に配布することとした。
- 招聘者の旅程について
 - 中国の古生物学会代表者: 6月9日(水)午後成田到着後つくばへ移動。6月13日(日)つくばより東京・成田経由で帰国。
 - 韓国の古生物学会代表者: 6月9日(水)午後成田到着後つくばへ移動。6月12日(土)つくばより東京・成田経由で帰国。現在招聘ビザの申請中。
 - Vermeij教授: 6月9日(水)成田到着後つくばへ移動。6月12~13日は三崎に滞在予定。6月15日(月)帰国。
 - Briggs教授: 6月7日(月)成田到着。6月8日は京都に滞在予定。6月9日(水)に京都よりつくばへ移動。6月13日(土)帰国。
 - Boyce博士: 6月9日(水)成田到着。6月13日(土)帰国。
- Tシャツの進捗状況について: 2009年11月1日より2010年3月19日までの期間, Tシャツデザインの募集を行った。その結果, 部門1(脊椎動物)146件, 部門2(無脊椎動物)178件, 部門3(微化石・植物などその他)66件の合計390件(総応募約420件)の応募があった。審査員(小田 隆, 加瀬友喜, 小笠原憲四郎, 真鍋 真, 西 弘嗣)の選定, 技術審査に基づき, 各部門から採用作品を1点ずつを選んだ。部門1は上松佐知子さん(つくば市), 部門2は山本彩乃さん(常滑市), 部門3は町田倫子さん(川崎市)の作品が採用された。5月中旬には発注し, 5月末に納品予定。なお, 各部門のデザインを50枚ずつ, 計150枚制作予定。Tシャツは1枚2,000円で販売予定。
- エコバッグの進捗状況について: 2010年年会の受付時に配布するエコバッグのデザイン案を決定し, 印刷会社に見積もりを依頼している。5月中旬には発注し, 5月末に納品予定。
- ストラップの進捗状況について
 - ストラップの制作は順調に進行中。
 - ストラップ(小)は400個制作中で, 5月10日頃に納品予定。
 - ストラップ(大)は20個制作中で, 5月20日頃に納品予

定。

- 記念行事の会場の状況について
 - つくば国際会議場(中ホールおよび小会議室2室)は6月10日午後と6月11日終日を予約済み。祝賀会会場(大中講義室)を予約済み。同時通訳などの機器設備を予約済み。
 - つくばエクスプレスつくば駅および秋葉原駅に案内を掲載予定。
- 会員名簿について: 2010年度内の発行を予定している。会員データシートの回収率は現在5割ほどで, さらなる高い回収率を目指している。
- 「古生物学事典」について: 「古生物学事典」の発行は順調に進行中。記念式典および総会会場において「古生物学事典」の販売を行いたい, との申し出が朝倉書店よりあった。
- 祝賀会参加費について: 祝賀会会費を, 一般会員・非会員は6,000円, 学生・友の会会員は3,000円とする。
- 記念式典および総会会場での「古生物学事典」の販売と販売案内のホームページ掲載について: 記念式典および総会会場において, 朝倉書店による「古生物学事典」の販売, および販売案内の学会ホームページへの掲載を承認した。
- 記念式典および総会の役割分担と進行について
 - 招聘者の送迎: 中国および韓国の古生物学会代表者の送迎は小笠原(会場校), 真鍋常務委員が担当。Vermeij教授の送迎は大路常務委員が担当。Briggs教授の送迎は東京大学学生, 前田常務委員が担当。Boyce博士は大路常務委員が迎えることとした。
 - 記念講演会および記念式典の司会は近藤, 行事係, 同時通訳(日→英)は真鍋常務委員が担当。祝賀会の司会は間嶋庶務または近藤行事係が担当。招聘者の控え室での対応は加瀬会長が担当することとした。
- 記念式典会場の式典看板について: 記念式典会場に, 「日本古生物学会創立75周年記念式典・シンポジウム The 75th Anniversary of Palaeontological Society of Japan」と記述した式典看板を掲げることとした。
- 75周年記念Tシャツとエコバッグ制作は, 現在印刷業者(株式会社プラスワンインターナショナル: 高松市)に発注済み。Tシャツの納品は5月29日, エコバッグの納品は6月4日頃の予定。Tシャツは記念式典・年会会場において, 販売ブースを設けて販売する予定。
- Briggs教授の航空券代金(New Haven発からNew Haven着まで)の全額を本学会が負担することとした。ただし, Briggs教授の申し出により講演謝金は支払わないこととした。
- 記念式典および記念シンポジウム招聘者の日当と宿泊費の支払い日数を, それぞれ確認した。
- その他の支出経費の詳細については, 会長, 庶務, 会計に一任し, 対応することとした。

その他

各賞推薦文と推薦文の読み上げ担当者について(加瀬)

- 学会賞(棚部一成君, 北里 洋君)の推薦文の作者および総会での読み上げ担当者について, それぞれ生形評議員, 西評議員が担当する。
- 記念式典において感謝状を贈呈する藤原ナチュラリスト財団の推薦文を読み上げる(読み上げは推薦者である大路常務委員が担当)。
- 学術賞の推薦文は遠藤常務委員が, 論文賞の推薦文は松岡評議員が, 貢献賞の推薦文は西常務委員が, それぞれ読み上げる。

審議事項

学術賞・論文賞・貢献賞の決定

学術賞・論文賞・貢献賞を決定した。受賞者と受賞題目は以下の通り。

学術賞：長谷川卓君「白亜紀の古環境学的及び層序学的研究」

平山 廉君「カメ類の古生物学的研究」

甲能直樹君「海生哺乳類の古生物学的研究」

論文賞：山田晋之介君・Dietmar Keyser君「Cuticle formation of the adductor muscle attachment in a podocypid ostracod, as an example of a calcified arthropod」*Paleontological Research*, vol. 13, no. 2, p. 103-118.

辻野 匠君・前田晴良君・前田陽子君「Taphonomic processes in diatomaceous laminites of the Pleistocene Shiobara Group (caldera-fill, lacustrine), Northeastern Japan」*Paleontological Research*, vol. 13, no. 3, p. 213-229.

貢献賞：Martin Janal氏「*Paleontological Research*の創刊以来のLanguage Editorとしての長年の貢献に対して」大倉正敏氏「脊椎動物化石の発見、剖出などによる研究への長年の貢献に対して」

両澤譲氏・両澤淑子氏「脊椎動物化石のレプリカ作製、着色による研究、および展示への長年の貢献に対して」

相馬中村層群研究会「化石の発見・採取、専門家への提供、および教育普及活動の長年の貢献に対して」

特別会員候補の推薦

高橋亮雄君、櫻井和彦君、長森英明君、坂井三郎君、須藤斎君、原田光一郎君、土屋正史君、上松佐知子君、山田 努君、栗原憲一君、楠橋 直君、斎藤めぐみ君、小原正顕君の計13名が特別会員に推薦され、これらを承認した。会員資格変更を受諾するかどうか本人に打診する。

名誉会員の推薦

石崎国熙君、斎藤常正君を名誉会員に推薦する案を総会に諮ることとした。

賞の委員半数改選

平山 廉君と北村晃寿君を新たに選出した。非改選の遠藤一佳君(幹事)、松岡 篤君、加瀬友喜会長、大路樹生PR編集長の6名で2010年度賞の委員会を構成する。

2011年年会・総会開催地の決定

2011年年会・総会の金沢大学での開催を決定した。開催日は2011年6月下旬から7月上旬で調整中。

第160回例会(高知大)シンポジウム案について

第160回例会シンポジウム案 松本達郎名誉会長追悼シンポジウム「白亜紀研究の進展」(世話人：平野弘道君、棚部一成君、利光誠一君、前田晴良君)を承認した。

ポスター賞選考委員の選出

2010年年会のポスター賞選考委員に、生形君(委員長)、北里君、甲能君、西君、佐藤君を選出した。

2009年度決算について

2009年度の決算案について検討し、これを承認して総会に付議することとした。2009年度は学会基金を取り崩したので、学会基金取り崩し分を除いた決算案と基金取り崩し分の決算案とを区別して総会で説明する。

2010年度予算案について

予算案について検討し、これを承認して総会に付議することとした。2010年度は75周年記念事業を行うので、学会基金取り崩し分を除いた(通常)予算案と基金取り崩し分の予算案とを区別して総会で説明する。

MediaProによる「化石」の電子ジャーナルの配信について

和文誌「化石」78号以降のコンテンツの電子版公開について、オンラインストレージのMediaProを用いて、「化石」の

PDFファイルを配信することを承認した。出版後1年以内のコンテンツは学会会員および友の会会員に限定し、パスワードを設定して配信する。

賞の委員会開催時期について

現在の賞の委員会の開催時期では、評議員会での決定前に賞状の発注、授賞式への出席依頼を行わなくてはならないので、賞の委員会の開催時期を約半年繰り上げる変更案(10月下旬に推薦依頼、11月下旬に推薦締め切り、賞の委員会を12月上旬に開催、1月下旬の評議員会で決定)を承認した。ただし、移行期間で論文賞対象巻号について変則的な対応が必要となる。

総会議事の確認

総会の議事次第と段取りを確認した。総会でポスター賞の授賞式を行う事を検討したが、予定されているプログラム通り、ポスター会場においてポスター賞授賞式を行ったのち、総会を開催することとした。

次回評議員会(第4回定例評議員会)の日程について

次回評議員会(第4回定例評議員会)を2011年1月27日(木)午後1時30分より、高知大学において開催することとした。

評議員選挙における会長経験者の扱いについて

より多くの若手会員が評議員に選出され、本会の運営に携わっていく重要性に鑑み、評議員選挙における会長経験者の扱いを検討するよう要望があった。今後常務委員会等で議論し、次回評議員会で審議することとした。

2010年度総会

2010年6月12日(土) 16:50~18:00、筑波大学1H201教室で開催された。出席111名、委任状24名の計135名が参加(定足数106名)。議事次第は以下の通り。

1. 開会
2. 会務報告
 - 規則・規定・内規の変更点。
 - 学会から提出した意見書について
 - 昨年総会以降の会員動向：入会36名、退会19名(うち逝去4名)、会員数1,053名。
 - 行事関連：千葉年会と琵琶湖例会の報告、次回例会(高知)、年会(金沢)の予定。
 - 学会誌：PR科研費採択、「化石」電子版配信開始。
3. 地球惑星科学連合、学術会議、自然史学会連合報告
 - 学術会議：活動報告、大型研究計画マスタープラン。
4. 名誉会員の推薦

石崎国熙君。
5. 学会賞・学術賞・論文賞・貢献賞の授与

学会賞：北里 洋君、棚部一成君
学術賞：長谷川卓君、平山 廉君、甲能直樹君
論文賞：山田晋之介・Dietmar Keyser君、辻野 匠・前田晴良君
貢献賞：Martin Janal氏、両澤 譲・淑子氏、相馬中村層群研究会、大倉正敏君
6. 2009年度決算報告
7. 2010年度事業計画および予算案
8. 閉会

各賞贈呈文および授賞ポスター

日本古生物学会賞（横山賞）

北里 洋殿

北里 洋氏は、地球上の生物の変遷（生命史）と地球史との関わりを理解することを目的として、有孔虫類（原生生物）を対象に研究を行っている。北里氏の研究は、現世生物を通じて有孔虫類の進化、古生態の理解にアプローチするところに特徴がある。

北里氏は、大学院および学位取得後数年までは日本の上部新生界より産出する底生有孔虫化石の研究を行った。学位論文は、房総半島に分布する上総層群梅が瀬層U6層準に沿った底生有孔虫化石の群集解析であった。また、日本海隠岐堆から採取したピストンコアを解析し、最終氷期に日本海が外海から孤立し、日本海表層の塩分が極端に低くなったこと、その結果、日本海の深海部が無酸素化したこと、そして後氷期になってからの酸化的な海洋への回復過程を明らかにした。さらに、底生有孔虫化石から古水深を推定し、黒鉄鉱床形成時の東北日本弧の海底地形の復元を行い、黒鉄鉱床が島弧の背弧海盆に形成されていることを示した。これらの成果は、日本海の形成や日本列島の地史を考察するときの重要な成果であり、現在も引用されている。しかし、北里氏は、これらの研究を続けながらも、その基本となる有孔虫の生態学的な研究が、一部の大型有孔虫や浅海性有孔虫を除いて、ほとんど進歩していないことに疑問をもっていた。そこで、化石有孔虫の研究の傍ら、研究分野としては最も遅れていた「生物としての有孔虫の研究」を開始した。北里氏は綿密に計画を立て、また飼育装置も自作したうえで、浅海から深海までの底生有孔虫を堆積物とともに飼育する実験を開始した。飼育時の有孔虫の生態は、横倒しにした双眼実体顕微鏡を用いて、堆積物断面に沿って観察した。その結果、有孔虫は堆積物中を動き回る内生生活者が多いことを世界で初めて明らかにするとともに、生息姿勢、移動、殻形成、食性、共生関係、再生産などに関する底生有孔虫の生態を次々と解明した。飼育では、深海生有孔虫の研究がとくに有名である。おもに相模湾から有孔虫を採取し、飼育時の有孔虫の生態を観察することで深海の底生有孔虫がどのような生活様式をもっているかを明らかにしたことは世界の研究者に驚きを持って迎えられた。その後、世界の有孔虫研究者は北里氏の研究グループの開発した手法や実験装置を模倣するようになった。さらに近年では、世界最深部のマリアナ海溝チャレンジャー海淵から有孔虫を採取し、これらが原始的な系統群に属するグループであることを明らかにした。また、共同研究者とともに早い段階からDNAの研究にも取り組み、形態と分子系統との関係を議論した。

北里氏は環境を制御した飼育実験にも取り組み、有孔虫と環境の関係の理解にも務めている。近年、測定機器の進歩により石灰質殻の微量元素を利用して、水温、塩分、生物生産など、過去の環境を復元する方法が数多く提案されるようになった。しかし、微量元素の分布は、生物学的な要因（vital effect）に強く影響を受ける。有孔虫では、このような基本的な事象はほとんど理解されていなかった。そこで北里氏は、共同研究者とともにこの問題に取り組み、環境を制御した飼育実験を通じて、殻への微量元素の取り込みを明らかにした。それと並行して、セジメント・トラップや安定同位体トレーサーを用いて物質循環における有孔虫の役割も明らかにした。また、近年では海底の堆積物-水境界中の酸素濃度を二次元画像として表示するオプトード装置を用いた研究も行ってお

り、酸化・還元という真核生物にとって根本的な環境要因について理解すべく、複数の共同研究者と共に取り組んでいる。このように、北里氏は「有孔虫生物学」、「実験古生物学」ともよばれる新しい科学領域を創成し、世界の同分野の指導的な役割を果たすと共に、地球化学などの近隣分野へも強い影響を与えている。

北里氏は、所属していた大学や独立行政法人において数多くの学生を育成した。また、諸外国の学生・研究者も外国人招聘研究員などとして受け入れ、「有孔虫生物学」あるいは「実験古生物学」に関連した研究を行った。その結果、多くの学生が、国内外の大学・研究機関において活躍している。北里氏は、現在までに和文英文合わせて195編の論文、12冊の著書を出している。とくに、池谷仙之氏と共著の「地球生物学」は、地球史の通史として多くの大学で教科書として取り上げられており、この分野の教科書としては珍しくベストセラーの一つとなっている。この本が古生物学をはじめとする自然史に関する学問の普及に果たしている役割は非常に大きい。

北里氏は国際学術研究の展開にも貢献している。統合深海掘削計画（IODP）では、1997および1999年に行われたIODPの科学計画立案会議（CONCORD およびCOMPLEX meeting）に参加して以来、日本掘削科学コンソーシアム（J-DESC）の地下圏微生物部会委員および同部長となり、日本の地下圏微生物研究の先駆けを担った。また、IODPの諮問組織である科学計画委員会および執行委員会の委員を務め、その推進に大きな役割を果たしている。また、International Paleontological Associationの councilor at large（2006～2010）、CoML、COMARGE Project, Steering Committee Member（2006～2010）、EGU, Biogeosciences誌、編集委員（2009～）、SIBER Project, Steering Committee Member（2009～）など、国際学会の役員や編集委員、国際プロジェクトの研究推進委員会の委員を務め、全球規模での国際共同研究の展開を支えている。

北里氏は、日本古生物学会の活動にも貢献している。常務委員・幹事（1986年から幹事、1997～2001年の常務委員）、評議員（1997年以降現在まで）、会長（2005～2007年）などを歴任し、行事、「化石」編集、「Paleontological Research」編集、庶務、将来計画委員会など古生物学会の業務に数多く携わってきた。とくに将来計画委員会委員長として創立70周年シンポジウム「地球生命史研究の最前線」を立案し、成功に導いたこと、会長としては、学会事務センターの破産に伴う学会の財務状態の立て直し、古生物学会の年会や例会の改革、地球惑星科学連合への早い段階からの参加など、さまざまな問題に立ち向かい、前進させたことは特筆できる。地球惑星科学連合では、「地球生命科学セクション」を創設に関わり、現在、セクションプレジデントとして、地球惑星科学と生物学を結ぶ新しい学問分野の確立を目指している。

北里氏は、学術行政における古生物学の地位の確立にも尽力している。第18～19期日本学術会議古生物学研究連絡委員会委員および幹事（2000年10月～2006年7月）、第20期日本学術会議連携会員（第三部地球惑星科学委員会；2006年8月～2008年9月）、第21・22期日本学術会議会員（第三部地球惑星科学委員会および第二部応用生物学委員会；2008年10月～2014年9月）に選任され、古生物学に関連するいくつかの「提言」を提案している。近年の地球科学関連分野の提言において古生物関連分野の主張が数多く盛り込まれているのは、北里氏の貢献によるところが大きい。20期以降の新しい学術会議において古生物科学の諸問題を議論する場として、第三部（理工学）地球惑星科学委員会 IUGS 分科会のもとにIPA小委員会を発足させたのも記憶に新しいところである。

以上のように、北里氏は一貫して古生物学の研究・教育活

動に尽力し、「実験古生物学」とよばれる新しい学問領域を創設するとともに、国内外を通じて広く社会に活躍する幾多の有為な人材を養成した。その結果、有孔虫の研究を通して日本と世界の学問発展に貢献し、世界に日本の微古生物学のレベルの高さと多様性を広く認めさせることになった。また、日本学術会議、地球惑星科学連合などの活動を通じて、地球惑星科学分野、統合生物学分野などにおける古生物学研究の発展に多大な貢献を行っている。

日本古生物学会は以上のように、北里 洋氏の業績を讃え、ると共に、同氏の本会に対する著しい貢献を顕彰するため、ここに学会賞を贈呈し、感謝の意を表す。

日本古生物学会賞（横山賞）

棚部一成殿

棚部一成氏は、主に軟体動物を材料とした古生物学的研究を推進し、多数の国際的な業績を挙げた。とりわけ頭足類の進化古生物学的研究においては、研究史に残る傑出した業績を残し、当該分野の第一人者として国際的研究コミュニティを牽引してきた。一方、国内においては、進化古生物学分野のリーダーとして多くの若手研究者を先導してきたことに加え、最近では門下生や共同研究者と共により包括的な地球生命科学へと研究を展開し、今日における我が国の古生物学の多様化に大きく貢献した。20世紀後半に長足の進歩を遂げた進化古生物学は、古生物学に新たな概念や仮説演繹法的な推論形式をもたらしたが、一方で仮説の提唱の域を出ないような事例研究をも少なからず生み出した。棚部氏の研究流儀は、一貫して仮説の検証に趣を置いたものであり、仮説を効率的に検証するために計画的に研究を設計して確実に成果に結実させるその現代的なスタイルは、後進に多大な影響を与えた。

棚部氏のライフワークとも言うべき頭足類の進化古生物学的研究は、松本達郎教授の指導の下、九州大学大学院で取り組んだ、白亜系蝦夷層群産化石の研究に源流を發する。大学院修士課程では、ある進化系列に属するイノセラムス類の生物測定学的解析から、その生活史の進化について考察し、その成果を日本古生物学会報告記事で公表したが、これにより1975年度日本古生物学会論文賞を受賞した。博士課程ではアンモナイトの研究を本格的にスタートさせたが、ここでも生物測定学を駆使した研究手法を遺憾なく発揮し、「後期白亜紀アンモナイト *Otoscaphtes puerculus* および *Scaphites planus* の機能進化の研究」によって博士号を取得した。その後、棚部氏の興味はアンモナイトの顎器や現生オウムガイへと向かい、同氏の真骨頂とも言うべき頭足類の比較解剖学的研究の端緒となった。こうした棚部氏の初期の研究成果に対して、1982年度日本古生物学会学術賞が授与されている。

棚部氏は、アンモノイドをはじめとする頭足類の比較解剖学的研究において、顎器、歯舌、初期殻、隔壁襟、体管などの“パーツ”に注目し、その形態や微細構造を徹底的に調べて現生頭足類と比較してきた。長年にわたるそうした研究の対象は、古生代以降の様々な系統のアンモノイドやオウムガイ類まで広く及び、今日受け入れられている頭足類の系統仮説を支持する重要かつ不可欠な証拠の数々を構成している。また、初期殻の微細構造などから、アンモノイドが直達発生だった証拠を示し、さらにはアンモノイドが胚の段階では内殻性であったとする発達モデルを提唱するなど、アンモノイドの発生について最も重要な知見をもたらした。加えて、アンモノイドの卵塊や体管索を発見・記載するなど、アンモノイドの生活史や生理などに関する直接的証拠を提示してきた。一方、クビナガリュウ化石の腹部にアンモナイトの顎器が密集しているのを発見し、アンモナイトが長頸類に捕食されて

いたことを明らかにし、その成果を佐藤たまき君と共同でNature誌に公表したが、これは頭足類の顎器について長年積み重ねてきた比較形態学的知見がもたらした副産物である。以上は棚部氏の頭足類比較形態学のほんの一端に過ぎず、その他にも枚挙に暇が無い。「アンモナイトはどんな生物だったのか」という素朴な疑問に対して、今日の古生物学者は様々なことを語るができるが、そのうちの少なからぬ部分は棚部氏の一連の研究成果によるものであり、それらはアンモノイドの古生物学に打ち立てられたひとつの金字塔である。

それ以外にも、棚部氏の研究業績は多岐の分野に渡るが、その中でも特筆すべきは、二枚貝類を材料とした骨格年代学的研究である。愛媛大学時代に伊予河原津の干潟でカガミガイ *Phacosoma japonicum* を対象に行った野外調査に始まる一連の研究は、後に内外の研究者や門下生との共同研究として大きく発展したが、その範囲は進化古生物学の枠に留まらず、最近では古気候学的研究にまで及んでいる。他にも、アンモナイトや二枚貝のタフォノミー、二枚貝類の幼生生態、オウムガイの飼育実験などの古生態学的研究も手がけ、更には白亜系蝦夷層群の層序学的研究、白亜紀の古海洋学的研究、化学合成群集の研究などにもコミットしている。

研究者としての棚部氏の特質として大書すべきは、内外の様々な分野の多くの研究者と交流し、建設的な共同・協力関係を構築してきたことである。こうした点は後継者育成にも大いに生かされ、門下生などの若手研究者が国際舞台に日常的に接する環境を醸成してきた。Landman, Tanabe & Davis編の「Ammonoid Paleobiology (1996, Plenum Press)」は世界のアンモノイド研究者必読の教科書となっているが、その執筆陣には棚部氏以外にも複数の日本人研究者が名を連ね、当時のアンモノイド研究における日本の先進性が示されている。2007年9月には第7回国際頭足類会議を札幌に招致し、国内の若手頭足類研究者に新たな刺激を与えることとなった。

棚部氏は主に東京大学において数多くの古生物学者を輩出してきたが、指導を受けた門下生の研究内容の多様性は特筆に価する。同氏自身が得意とする比較形態学的方法や野外調査に限らず、他の研究者の協力の下、地球化学的分析、分子生物学的手法、コンピューターシミュレーションなどを駆使する多彩な研究者を育て上げた。まさに、学生の特性を伸ばすという教育の理想を実践してきたといえる。その一方、論文指導の徹底振りは比類のない程で、後進の研究成果を世に出すのに腐心し続けてきた。

学会活動においては、1987年以降現在まで日本古生物学会評議員として学会運営に献身されてきた。その間常務委員としては庶務・行事・欧文誌編集長・化石編集長などの要職を歴任された。2003・2004年度には会長として会務を主導し、学会事務センター破綻という未曾有の危機を乗り越えて、現在の新事務局体制の基盤を作った。また、会長在任時を含む2003年以降も、一編集委員として *Paleontological Research* の発展に今なお尽力されている。一方、1992年～2000年の間、学術会議古生物研連委員として科学行政にも貢献された。近年発足した地球惑星科学連合においては、2005年以降総務委員を務められている。

日本古生物学会は以上のように、棚部一成氏の業績を讃え、ると共に、同氏の本会に対する著しい貢献を顕彰するため、ここに学会賞を贈呈し、感謝の意を表す。

2009年度日本古生物学会学術賞

長谷川 卓君：白亜紀の古環境学的及び層序学的研究

古生物学は、元来化石を素材とし、生物進化の直接的証拠として研究され、地球の歴史を年代区分する根拠を与え、また古環境の重要な指標として長らく研究されて来た。近年

の科学と分析機器などの著しい発達、このような伝統のある古生物学において、復元できる精度と対象を拡大するという効果をもたらしている。その一例を光合成に於ける質量の異なる二酸化炭素の選択的吸収という現象と、気温上昇に由来する海洋の深層循環の減速乃至停止などの炭素循環の異常の総合的理解に基づく安定炭素同位体比の変動パターンによる地球規模の対比の実現に見ることが出来る。

長谷川 卓君は、東北大学大学院博士後期課程在学中の1993年に北海道の蝦夷層群分布域のうち代表的なセクションとして知られた小平町達布地域と大夕張地域の2セクションについて、浮遊性有孔虫層序を踏まえつつ安定炭素同位体比の変動パターンを陸上高等植物起源の有機物を用いて解析し、我が国で初めての安定炭素同位体比変動による高分解能の国際対比に成功した。続く1999年には、先に対比に成功した安定炭素同位体比変動パターンの Cenomanian/Turonian 階境界の上下に、浮遊性有孔虫の7つの datum planes を示すことに成功するとともに、5新種を含む17種を記載した。2000年には、Cenomanian/Turonian 両階について、先に報告した2セクションに古丹別セクションを加えることにより、蝦夷層群の炭素同位体層序が汎用的に使用可能であることを示すとともに、浮遊性有孔虫、アンモナイト類、イノセラムス類による対比の検証と問題点の明示し、さらには地域的に高い示準性を持った分類群の指摘を行い、同年度の本学会論文賞を受賞した。引き続き2001年には、有機岩石学的基础研究を行って、蝦夷層群に含まれる有機物が広い後背陸地から由来する高等植物であることを明らかにし、炭素同位体比層序構築に関して有機炭素を全岩分析することの有効性を示した。

長谷川君の研究は、このように炭素同位体層序による高分解能の国際対比を先導的に開発したことに留まらず、2003年頃より陸源有機物を用いる利点を最大限に引き出して、東アジアの白亜紀の植生を中心とした古環境の復元に発展させた。すなわち、地質記録として残る炭素種は、陸源有機炭素、海成炭酸塩炭素、海成有機炭素に分別されるが、それらの同位体組成には共通要素はもとより、炭素種特異的な要素を含むことに着目した。これらの $\delta^{13}\text{C}$ 値の時空的な差異は、古環境学的議論を可能にするという着想である。白亜紀中期の温暖で湿潤な気候は、Cenomanian期を通じて北東アジア周辺の後背地で優勢になっていく。この条件下で、森林密度の増加による CO_2 のリサイクル効果と気孔の開放効果は、蝦夷層群に供給される植物の $\delta^{13}\text{C}$ 値を負側にシフトさせた。大気・海洋の CO_2 分圧の漸進的な上昇が温室効果の駆動力として働いたが、それは同時に陸源有機炭素の ^{13}C 値と比較しうる海成有機炭素の $\delta^{13}\text{C}$ 値曲線の長期にわたる負への変動の原因となったと論じた。さらに調査域をサハリンにまで広げ、前記の論考を深め、世界的なりファレンスである欧米の変動曲線に非常によく一致する炭素同位体比層序を公表すると同時に、不一致に関しては欧米試料の続成を指摘するなど詳細な議論を行った。これらの炭素同位体値の炭素種の違いの解析と白亜紀古環境に関する論考は、多数の国際誌上で公表され、高い注目を浴びている。事実、これらの研究の一つである Palaeogeography Palaeoclimatology Palaeoecology 誌に発表された論文は、2003年度から2007年度の期間に最も高い被引用度数を記した論文として同誌から表彰を受けている。

さらに近年では、淡水・汽水・海水環境が複雑に交互すると考えられる手取層群について、有機地球化学的研究を開発しつつある。すなわち、岩石中の有機炭素および硫黄含有量の分析値より水の古塩分を推定することや、芳香族炭化水素の評価により野火の発生を議論するなど、陸上古環境を復元することである。

さらに個別有機分子を用いた炭素同位体比層序の構築を通じて地球史イベント発生時の陸域古環境について発展的な議

論を展開しており、扱う試料も海底コア、キューバ、ニュージーランドなど、地球を広く視野に入れている

このように長谷川 卓君は、明治以来の長い古生物学の研究史を持つ本邦白亜系を対象として安定炭素同位体層序という高分解能の国際対比の技法を開発・確立しただけでなく、古生物学の視点で分析化学的な諸手法を駆使し、それをフィードバックすることで古生物学の発展に貢献した。

日本古生物学会は、長谷川 卓君のこれまでの貢献と努力を高く評価し、学術賞を贈って今後の一層の発展を期待する。

2009年度日本古生物学会学術賞

平山 廉君：カメ類の古生物学的研究

かつてカメ類（爬虫綱カメ目）は、爬虫類の中でも原始的な無弓類に位置づけられ、その基本的な形態は白亜紀までには完成し、その後ほとんど変化することなく現在に至ったグループと見なされてきた。しかしその後の研究では、カメ類は無弓類よりもワニや恐竜などにより近縁な主竜形類として位置づけられるようになり、化石として発見される例も多いことから、爬虫類の進化史上の重要性が再確認されるようになった。

平山 廉君はこのような国際的な潮流の中、京都大学大学院在学中にカメ類の古生物学的研究に取り組んだ。120種を超える現生種の飼育観察や骨格標本の作製などの地道な努力をする一方、さまざまな新しい手法を積極的に導入・実践し、これまでに5属9種の新タクサを提唱するなど、同類の系統分類や進化に関する多くの業績を上げてきた。平山君は、このような研究を進めるにあたり、浅海成層より産出する石灰質ノジュール中にしばしば含まれる保存良好な脊椎動物化石の剖出に際し、国内では初めて酢酸や蟻酸を用いた化学的剖出法を導入し、標本の詳細な観察に基づく研究を押し進めてきた。また同君は、理論面でも国内で分岐分析を古生物学にいち早く導入した古生物学者と言える。こうした手法は、早くも1980年代の国内中新統や上部白亜系産のカメ類化石の研究に活かされている。1998年のNature誌に発表されたブラジル産の最古のウミガメ化石 *Santanachelys* の報告は、この化学的剖出法を用いた代表的な研究であり、国際的にも大きな反響を呼んだ。

初期の研究では、現生種を中心としたリクガメ上科の系統分類に着手し、その成果を1984年に公表している。その後、ウミガメ上科の系統分類に取り組み、機能解剖学的に同上科の進化パターンや海生適応を解明し、1995年にIsland Arc誌に発表した。*Santanachelys*や、1996年に当学会報告・記事に発表した最古のオサガメ科である上部白亜系の北海道産 *Mesodermochelys* の研究はとりわけ注目される。2001年には、特異な形態を持つ陸生カメ類 *Anomalochelys* を北海道の上部白亜系から報告し、この絶滅グループ（ナンシュンケリス科）の系統関係と古生物地理を明らかにした。また2000年には、白亜紀の陸生カメ類の系統分類をRussian Journal of Herpetology誌に発表し、その分化パターンが大陸の分裂と極めて整合的であることを論じている。これらリクガメ上科、ウミガメ上科と中生代の陸生カメ類に関する平山君の系統分類の研究は、現在に至っても内外の専門家から高く評価されている。

2000年代からは、新生代のカメ類化石の研究にも意欲的に取り組み、白亜紀末の大量絶滅事変を生き延びた本群の現在に至るまでの進化過程を解明しつつある。特に2007年にPalaeontological Research誌で発表した更新統カメ類のニホンハナガメ (*Ocadia nipponica*) の研究は、第四紀における日本列島の古環境の推定にも少なからず影響を与える可能性がある。また2003年にPalaeontology誌において公表したよう

に、フランスのTongらとの共同研究により、モロッコなどのアフリカ北部の上部白亜系～古第三系より産出するウミガメ上科の多様性の解明に取り組んでいる。

平山君は、1990年代から手取層群桑島層（下部白亜系）、2001年～2004年には下総層群清川層（中部更新統）、さらに2007年からは島根県の古浦層（下部中新統）など、全国から参集した学生らと共に脊椎動物化石産地のフィールドワークに積極的に取り組んでいる。平山君のこれまでの研究により日本列島から初めて報告されたカメ類はプロステガ科、オサガメ科、アドクス科、スッポンモドキ科、ナンシユケリス科やオオアタマガメ科など多様なグループに及び、2006年の当学会和文誌・化石で総括され、本群の古生物学的研究の重要性を説いている。

以上のように平山君は、飼育観察、骨格標本の作製などに地道な努力に加え、常に新しい技法や理論を率先して導入・実践し、カメ類の系統進化に関して多くの成果を発表し、それらは国際的にも高く評価され、現在この分野では世界のリーダー的存在となっている。

日本古生物学会は、平山 廉君のこれまでの努力と成果を高く評価し、ここに学術賞を贈って今後の一層の発展を期待する。

2009年度日本古生物学会学術賞

甲能直樹君：新生代海生哺乳類の古生物学的研究

日本列島は、新生代の海成層が広く分布するため、古くより海生哺乳類の化石が数多く産出している。種の記載や系統解析に加え、グローバルな環境変動に伴う多様性創出の解明やタクサ間相互の生態的關係にも議論が及ぶなど、最近の化石海生哺乳類の研究の進展は著しい。

甲能直樹君は、横浜国立大学大学院修士課程在学中の1987年に、海生哺乳類の一系統群である鯨類の系統進化と水生適応の研究に着手した。まず、青森県の中部更新統から産出したアシカ科鯨類化石の群集解析をテーマに選び、尻屋崎に分布する石灰岩体上の海岸段丘堆積物から産出した500点を超える鯨類の犬歯化石を素材とした研究をおこなった。この研究では、東北地方に広く追跡できるMIS-5の段丘面の対比に基づいた化石の年代の推定を行い、多数の犬歯標本と現生集団のそれらと統計的手法で比較し、犬歯の直径と幅の統計値で日本近海の鯨類の全種類および性別・年齢が識別できることを初めて明らかにした。また、この化石集団標本の種構成と性別・年齢構成から、これらが生息地の集団組成を反映したのではなく、アシカ科鯨類特有の索餌回避に伴った季節的な滞留個体群の性別・年齢構成を反映したものであることを示し、更新世の化石集団からも現生種と同様の広域的かつ周期的な索餌回避の存在を明らかにすることに成功した。

甲能君はその後、鯨類全体の系統進化と多様化に関する一連の研究に着手し、1993年には形態形質に基づいた分岐分析によって、それまでの定説であった鯨類のクマ類起源説を否定し、鯨類がイタチ類の中から進化した可能性に初めて言及した。この仮説は現在では学界で広く支持されており、形態形質に基づいたイタチ類起源説の初めての系統仮説として注目されている。1994年以降、同君はセイウチ科の新種を記載し、分岐分析に基づいてこのグループ全体を再定義をおこなった。また、現在では1属1種のみで代表されるセイウチ科が、少なくとも中新世から鮮新世にかけては2亜科11属以上からなる多様な系統群であることを明らかにした。1996年には、科のレベルで絶滅しているアロデスムス類の日本産標本について、Paleontological Research誌上で新種記載を含む総括を行い、古海洋学や古地理学、軟体動物古生物学や微

化石生層序の最新の成果を取り入れて、この仲間の時空分布を高分解能で示した。そして、生息地がこの時代の鯨類としては例外的な外洋であったこと、その絶滅が古環境変動に良く一致していることなどを明らかにし、この研究で本学会の論文賞を受賞した。

2000年代には、ヨーロッパや北米で6属9種に細分されていた北大西洋の鮮新世のセイウチ亜科鯨類について、ヨーロッパと北米各地に所蔵されるすべてのタイプ標本を実見し、それらがすべて同一種の年齢変異、性差、個体変異に過ぎないことを明らかにした。この研究は、分布が極めて広く個体変異も大きい鯨類、ひいては海生哺乳類の研究に求められるアプローチを示したものとしても高い評価を得ている。

近年では、鯨類の系統進化と古生物地理に関する論考をさらに深めるべく、分子系統学者と連携して、分子系統学と哺乳類古生物学の統合を試みている。2009年には分子遺伝学分野の国際誌GENE誌上でアシカ科鯨類を対象にそれぞれのクレードの推定分岐年代と古環境変動との関係を明らかにし、この仲間の北半球から南半球への移動と南半球でのダイナミックな放散の歴史を描き出すとともに、その種分化の原動力にも言及し、高く評価されている。

このように、甲能直樹君は、新生代を通じて進化、発展してきた海生哺乳類を対象として、機能形態学、年代層序学、シーケンス層序学など周辺分野の最新の成果を取り入れるとともに、分子遺伝学などの分野とも協働して海生哺乳類のダイナミックな適応進化の過程を解明してきたことは高く評価される。

日本古生物学会は、甲能直樹君のこれまでの貢献と努力を高く評価し、学術賞を贈って今後の一層の発展を期待する。

2009年度日本古生物学会論文賞

辻井 匠君, 前田晴良君, 前田陽子君: Taphonomic processes in diatomaceous laminae of the Pleistocene Shiobara Group (caldera-fill, lacustrine), Northeastern Japan. *Paleontological Research*, vol. 13, no. 3, pp. 213–229 (2009). (栃木県塩原層群（湖成更新統）の珪藻質ラミナのタフオノミー)

栃木県塩原は、更新世カルデラに形成された湖成層中に動物化石を産出することで知られている。湖成層特有のラミナの発達した細互層（ラミナイト）には、動植物の軟組織が仔細に残されていて、“とくに保存の良い”化石鉱脈（ラガシュテッテン）の例として特筆されてきた。このような化石から、通常は残り得ない古生物の実体と、より正確な古生態系を明らかにすることが可能となる。また、例外的に“保存の良い”化石がどのような過程を経て残されたかという問題は、化石化作用（タフオノミー）の理解に極めて重要なことであり、地層に含まれる化石からいかに古生物学的情報を引き出すかという根本的な問題に不可欠な研究である。辻野君らは、“保存の良い”化石を含むラミナイトの堆積・続成過程を検討し、注目すべき成果を本論文で示している。

塩原の湖成ラミナイトは、初生的な構成粒子の違いと続成変質の程度から5つのタイプに分けられる。未変質のラミナイトには、碎屑物が卓越するタイプと浮遊性珪藻殻の密集した白色ラミナを有するタイプとがある。後者はさらにシリカ鉱物の変質段階で、陶器岩質タイプおよび特有な黒色バンドを有した3つのタイプがある。珪藻殻は未変質のオパールAから、オパールCTの微小球を生ずるようになり、それに伴って珪藻殻の初生形態は失われ、珪藻質白色ラミナの厚さや空隙の減少が起こる。さらに変質した段階では、白色ラミナの中にオパールCTが緻密に融合した黒色バンドが出現し、見かけ上ラミナが倍増したタイプになる。この黒色バンドが拡

大すると、上下の白色ラミナがすべて黒色バンドに取り込まれ、ラミナの色調反転を生じたタイプに達する。

オパールが続成変質は、海成の珪藻質堆積岩の埋没続成作用でも知られていたが、塩原の珪質ラミナイトの例はその局所的分布などから低温熱水変質に起因すると考えられる。変質に伴って、珪藻殻の保存状態は劣化し、ついには殻形態を失うが、逆に多くの大型動植物遺体は分解を免れ、保護・保存される条件を生じたことを辻野君らは明らかにした。“とくに保存の良い”化石鋳脈には湖成層やラミナイトの例が多く、本研究で見いだされた化石本体と周囲の微化石遺骸の保存のパラドックスは、他の化石鋳脈の成因を解く重要なヒントとなる。

以上のように化石の保存には、堆積過程のタフォノミーだけでなく、堆積後の続成過程も重要だということが本論文から汲み取れる。その結論はラミナイトの微細構造や鋳学的な検討と、何よりも野外観察と緻密な室内観察によって得られた成果であり、その着眼点が高く評価される。

日本古生物学会は、辻野 匠君、前田晴良君、前田陽子君の努力とその研究成果を高く評価し、ここに論文賞を贈り、今後の一層の活躍を期待する。

2009年度日本古生物学会論文賞

山田晋之介, Dietmar Keyser 君: Cuticle formation of the adductor muscle attachment in a podocopid ostracod, as an example of a calcified arthropod Paleontological Research, vol. 13, no. 2, p. 103–118 (2009). (カイクシメ下綱オストラコーダにおける閉殻筋付着部位のクチクラ形成: 石灰質殻を持つ節足動物の例として)

オストラコーダは甲殻類のうちで二枚の殻を持ち、閉殻筋で殻を閉じる動きを行う動物である。閉殻筋が殻に付着する部位には筋痕が残され、この形態は古生代以降現生のオストラコーダに至るまで重要な分類形質として使われてきた。しかし筋肉の付着が脱皮後の新たな殻に対してどのように行われるのかは全く研究されてこなかった。当論文はカイクシメ下綱オストラコーダを材料に、透過型電子顕微鏡による観察を行い、閉殻筋の殻への付着がどのようになされるのか、そして脱皮前と脱皮後の過程でその付着様式がどのように変化するかを初めて記載したものである。

閉殻筋は、特殊な表皮細胞である tendinal cell を介して、クチクラに付着している。強力なデスマソーム（接着斑）が筋肉細胞を tendinal cell に付着させ、一方 tendinal cell は、クチクラ内の繊維によってクチクラに接続し、そこには hemidesmosomes（半接着斑）が発達する。脱皮前のクチクラの沈着は、伸張したクチクラ内の繊維の周辺で起こり、これらの繊維が tendinal cell と脱皮以前のクチクラとを結び付けている。従って、脱皮前には筋肉が新旧の殻両者に付着することで殻の開閉を行っている。脱皮後には殻のクチクラは石灰化を開始し、急速にその厚さを増すが、tendinal cell が微小管のような力を伝達する構造で充分に満たされているので、筋痕の石灰化は明らかに procuticle（原表皮）の石灰化よりも遅れて進行する。細胞内の力の伝達に関与しない部位にのみ顆粒が蓄えられ、クチクラの石灰化は始まる。また筋肉付着部位の procuticle 中には有機マトリックスが少ないので、このことも石灰化の進行を遅らせている。

このように、当論文は、オストラコーダの筋肉付着部位におけるクチクラ形成の過程を初めて明らかにした研究といえる。山田・Keyser 両君の研究例は筋痕を持つ化石オストラコーダに応用できるのみならず、殻を持つ節足動物のクチクラ形成にも応用できるものである。現生、化石を含めて分類上重要視される形質の形成過程を明らかにすることは必ずしも容

易ではない。しかし山田・Keyser 両君は透過電子顕微鏡を用いる高い技術力と優れた観察力で、従来明らかにされていなかった形成過程を解明することに成功した。日本古生物学会は、両君の努力と成果を高く評価し、ここに論文賞を贈り、今後の一層の研究の発展を期待する。



学会・学術・論文各賞受賞者

前左から甲能直樹君（学術賞）、長谷川卓君（学術賞）、棚部一成君（学会賞）、加瀬友喜会長、北里 洋君（学会賞）、平山 廉君（学術賞）、後左から前田晴良君（論文賞）、辻野 匠君（論文賞）、山田晋之介君（論文賞）の代理の東 亮一君

2009年度日本古生物学会貢献賞

Martin Janal 殿

マーティン・ジャーナル博士は、日本古生物学会の欧文誌 Paleontological Research 誌の language editor として、1997年の創刊以来、現在まで貢献して来られた。その貢献は、その前の日本古生物学会報告・記事の時代にまで遡る。ジャーナル博士は、母国語である英語の校閲はもとより、ロシア語、ドイツ語、フランス語、スペイン語等ヨーロッパの言語で書かれたすべての文献の表記等の校閲に、その無類な言語能力を遺憾なく発揮して来られた。さらに、古生物学、分類学についての該博な知識をもとに、通常の言語校閲では望むべくもない、原稿の内容にまで踏み込んだ専門的なコメントをいただくことも少なくなかった。また、雑誌編集上の諸事情から、非常に短い時間で校閲をお願いすることもしばしばであったが、そのような際もジャーナル博士には、快く、迅速にご対応いただき、Paleontological Research 誌の定期的発行と品質の維持・向上に大きく寄与され、献身的に当誌の援助を行ってこられた。Paleontological Research では国際的な注目を高めるために国際シンポジウムなどを特集しているが、博士の提案による企画である。Paleontological Research は、平成22年度からインパクトファクター付与の対象誌に選定されたが、博士の貢献がその一因にあると言っても過言ではない。

学会事務センターの破綻によって、当会の財政が逼迫していた時期には、博士の方から編集謝金の据え置きを申し出るなど、当会との契約は長期にわたってボランティアに近いものだった。これは、博士が古生物学徒として古生物学を愛する気持ちが根底にあることはもちろんだが、博士が日本の文学や文化に造詣が深く、日本の古生物学者との交流を楽しみにしているからこそ築くことのできた、当会にとって幸運な関係であると言える。

日本古生物学会は、Janal 博士のこれまでの献身的な努力とその成果を高く評価し、ここに貢献賞を授与する。

2009年度日本古生物学会貢献賞

両澤 譲殿, 淑子殿

両澤 譲氏, 淑子氏は, 1972年に武蔵野美術大学実技専修科研究課程油絵専修科を修了後, 絵画(譲氏), コラージュ作品など(淑子氏)の制作のかたわら, 1977年より脊椎動物化石のレプリカ作りに従事してきた。おもに国立科学博物館で制作された脊椎動物化石のレプリカの着色を担当するとともに, 小村悦夫氏, 円尾博美氏, 鈴木武義氏(当会貢献受賞者)の型取りと復元骨格組み立てを補佐してきた。実際の化石の表面形状を忠実に再現した着色技術は, 展示の美的評価はもとより, 形態学の研究者からも高く評価されている。

両氏が関わった復元骨格は, アメリカ自然史博物館のパレオパラドキシア, ロンドン自然史博物館のステゴドン, 国立科学博物館のフタバズギリュウ, 神奈川県立生命の星・地球博物館のナウマンゾウ, 北九州市立自然史・歴史博物館のプロトプテルムなど国内外の博物館に数多く展示され, 古生物学の普及に多大な貢献をしている。とくに, 国立科学博物館に展示されている獣脚類恐竜バビラプトルの展示は, 両氏が論文中の産状図を基に, 化石の産状を三次元で復元するという斬新な試みとして, 海外の博物館からも注目を集めている。

また, 両氏は長年にわたりシリコンによる型取り技術の研究し, それまで不可能と言われた数ミリサイズの繊細な脊椎動物化石の型取りや, 複雑で繊細な人類頭骨などの復元レプリカ制作を可能にするなど, その技術の高さには定評がある。両氏による精巧な復元レプリカは, 海外の博物館標本との三次元形態の比較を可能にし, 手取層群の小型脊椎動物化石の研究の進展につながるなど, 我が国も古生物学研究にも多大な寄与している。

日本古生物学会は, 両氏のこれまでの努力と成果を高く評価して, 貢献賞を授与する。

2009年度日本古生物学会貢献賞

相馬中村層群研究会

相馬中村層群研究会は, 福島県南相馬市を拠点として活動するアマチュア研究者からなる団体で, 2002年に結成された。研究会の結成以前から, 構成員による活発な化石の採集活動が展開され, 標本類は地元の南相馬市博物館や鹿島歴史民俗資料館をはじめ, 福島県立博物館, 茨城県自然博物館などに収められている。近年では常磐自動車道延長工事にかかわり, 多量に産出している相馬中村層群産の化石を確保するとともに, 専門家にタイムリーな情報提供を行っている。研究会の構成員によって採取された標本は, Paleontological Research誌をはじめ, 福島県立博物館紀要, 茨城県自然博物館報告書などで記載されるとともに, 豊富な写真とともにリストが掲載されている。このように, 福島県相馬地域から産出する貴重な化石を系統的に採取し, 長年にわたり専門家へ提供し続ける功績が顕著である。

相馬中村層群研究会の結成に先立つ1997年には, 当時の鹿島町に鹿島町少年少女化石探検隊を結成し, 地元の子どもたちに対して, 化石採集の会を催したり, 地元博物館での普及活動を共催したりするなど, 古生物学の普及活動を継続的に行っている。さらに, 相馬中村層群研究の普及活動は, 出版物の発行にもおよんでいる。「水の惑星で栄えた生きものたち—福島県・鹿島町の化石物語」の出版(2002.2.1)や相馬中村層群研究会誌の発行(2009.4.20 創刊号)などにより, 古生物学の普及にも大きく貢献している。

日本古生物学会は, これまでの相馬中村層群研究会の功績に対し貢献賞を贈り, 同研究会の今後の一層の発展を期待す

る。

2009年度日本古生物学会貢献賞

大倉正敏君

大倉正敏君は名古屋市役所に勤務するかたわら, 1980年代より国内における中・古生代の魚類(板皮類や軟骨魚類)や爬虫類, 哺乳類などさまざまな学術上重要な脊椎動物化石を収集し, それらを国立科学博物館, 富山市立科学文化センター, 福井県大野市立博物館, 岐阜県高山市荘川町などの博物館や公共の研究機関に寄贈し, それぞれを専門とする研究者に提供し, 古脊椎動物学研究の最近の進展の重要な一翼を担ってきた。

大倉君はさらに, 独自の酸処理法やボロンを用いた剖出法, アートナイフを用いた化石の剖出法を開発し, これまで不可能であった硬質な岩石中の微小な化石を見事なまでに剖出することに成功し, その技術の普及にも尽力した。大倉君のこのような技術によって, 本邦の下部白亜紀における陸生脊椎動物群の多様性が解明されたといっても過言ではない。さらにまた, 大倉君は, 日本国内はもとより, イギリスや中国などの古脊椎動物学者から標本の剖出や破損した標本の修復を依頼されることも少なくない。

大倉君は, 特に定年退職後は各地の博物館や資料館などの行事で講師を務め, 一般向けに化石採集や剖出の面白さを伝えることでも古生物学の普及にも少なからず貢献している。日本古生物学会は, 大倉正敏氏のこれまでの努力と成果を高く評価し, 貢献賞を贈って今後一層の発展を期待する。



貢献賞受賞者

前左から大倉正敏君, 相馬中村層群研究会八巻安夫氏, Martin Janal氏, 加瀬友喜会長, 両澤淑子氏, 両澤 譲氏, 後左から相馬中村層群研究会の栃久保廣恭氏と荒 好氏

日本古生物学会 2010年年会 (6月筑波大学) 優秀ポスター賞

御崎明洋・前田晴良君

白亜紀後期異常巻きアンモノイド *Pravitoceras sigmoidale* とそれに付着する二枚貝の産状

望月貴史・遠藤一佳君

祖先的主竜類のミトコンドリアゲノム復元

編集委員会より

本88号は学会創立75周年記念特集号となりました。このような節目の号の編集に携われたことは大変光栄に思いますが、一方で後世に残るアーカイブとして十分なものが出来たかどうか自問する気持ちもあります。今号を企画・編集するにあたり、50周年時の37号に目を通しましたが、正直なところそのあまりの格式の高さに気押されました。とはいえ、アーカイブのあり方も時代とともに変わるように思います。75周年記念事業を企画する際に50周年時のどのような情報を参考にしようとしたかを想起し、次の100周年にいかなる情報を残すべきかを考えて本号を編集しました。

学会創立25周年の1960年にA5版として発刊された「化石」は、1982年の31号よりB5版となり、2002年の72号から現行のA4版へと体裁を変えてきました。時代とともに変化してきた欧文誌との役割分担を反映して、掲載内容も少なからず変わってきました。学問を取り巻く今日的状況の中で、和文誌が果たすべき役割についてしっかりと考えながら今後の編集に取り組んでゆきたいと思います。100周年を迎える頃、「化

石」が更にどのような進化を遂げているのか、25年後の編集長が本75周年記念号をどのような眼差しで眺めるのか、それを決める歴史は既に始まっています。

(生形貴男)

時流に即した雑誌出版の重要性を改めて感じています。

(江崎洋一)

本号では、古生物学会歴代会長の先生方のお写真を集めることができ、あらためて学会の歴史の重さを実感することができました。100周年記念特集号では、どの方のお写真がこの後に続くことになるのか、25年後が楽しみです。

(佐藤慎一)

日本古生物学会75周年を記念した本誌を発行できることは、大変な慶びである。先人の努力と、それを引き継ぐ若手が育っているということである。あと25年を経て、どんな100周年を迎えるのだろうか。日本の古生物学がさらに発展していくことを心より願う。

(矢島道子)

